

木
儀



門 18
號 1989
14

叙

叙

南北太平記者。元出於任伯之
手。成於吳利氏之口。而直義學
久革之。刪改之。正其出。雜以怪
誕之。且於吳利氏。百方回護。
於梅新。諸公。極力貶抑。欲以欺
愚。以爲後世也。蓋尊吳氏兄弟。非
有絕人之才能。勇武。固非梅新



諸公之敵也。唯當時宦后弄權。長舌毀事。二兗依之以陷忠正。語當四討。務殲士民怨叛之心。二兗因得以嘯聚逞其凶威焉耳。其子固石勒之所恥而不為。惟二兗亦自乞其醜也。以故於貶抑彼以回護我。然而楠新諸公忠誠英武之跡。終不可沒而貶抑焉。二兗、逆醜穢之行。終不可沒而回護焉。抑令其不唾罵醜詆者。而若楠新諸公。雖屈乎當時。其心若伸于後世。人之仰與日月争光。嗚乎。人心秉彝之誠。不可誣也。如此。正身以特。知有以方。牙仇。國繪。素乞。序。閱之。同附評論。博徵於古。時異。本以。

抑焉。二兗、逆醜穢之行。終不可沒而回護焉。抑令其不唾罵醜詆者。而若楠新諸公。雖屈乎當時。其心若伸于後世。人之仰與日月争光。嗚乎。人心秉彝之誠。不可誣也。如此。正身以特。知有以方。牙仇。國繪。素乞。序。閱之。同附評論。博徵於古。時異。本以。

辨倭臣允徒之誣也。予嘉其有
補於事。彙彘之誠也。為序而
與。

文久辛酉百夏月

松島峰道人撰



南北太平記圖會三篇

總目錄

卷之十三

北山公宗密企及逆
露頭隱謀官軍圍北山
極罪文衡入道被行刑
長年誠忠殺害公宗卿
為探題直義下東國
北條餘類蜂起東北
直義奸計弒護良親王
殺宮淵邊憶眉間尺故事
准后御口入再萌大亂

賜節度尊氏進發鎌倉

尊氏大軍戰新阪

平氏破而退箱根

鎌倉滅亡時行隱跡

直常下向而時兼亡北國

師直闕新田一族所領

義貞追足利一家給人

卷之十四上

恐逆鱗尊氏奉奏狀

義貞隱謀欲害正成

請義貞奉奏狀征尊氏

諸御議新田足利確執

候禁闕正成速忠言

正成關東進發望搦手

賜宣旨義貞進發鎌倉

諸國武士競服尊氏

隔矢矯川義貞與直義戰

公綱大進破足利勢

義貞渡手越川破直義

上杉重能偽編旨激將軍

兩軍大戰箱根竹下

搦手破大友鹽冶變心

卷之十四下

官軍退箱根山

篠塚奮勇開血路

義貞全昌躍身越天龍川

栗生名張漲浪救軍馬

加々見下山殘書退陣宮

朝敵蜂起早馬走洛

正成嘆而乞東國下向

正成攝州發向破赤松

官軍分備防尊氏大兵

正成遠智敵苦糧草

野木賴玄獨戰大渡

敗山崎義頭救義助

官軍敗績主上落都

勅使川原決死羅城門

正成防禦摧肺肝

長年技敵懸向內裏

親光狙尊氏忠死洛陽

主上坂本大宮籠願文

卷之十五上

山門拒園城寺戒檀

頼豪憤死雙嶽岳

顯家上洛破路次敵

定禪堅備戰官軍

義貞四天王顯怪力

黨官軍山徒燒三井

義貞進軍入京都

義貞正成談機密計

奇兵計義貞破足利兵

尊氏敗軍走丹波路

定禪智擊義貞油断

名和楠救義貞破定禪

官軍三將取闖寄京都

神樂岡全村放手突箭

卷之十五下

正成作剝楯拉差敵

義貞省身規尊氏

正成遣泣男欺敵兵

附り泣男杉本ノ傳

尊氏落京都趣丹波

宇都宮重取降官軍

正成智辯述必勝謀

豐嶋川義貞戰直義

正成進大破足利兵

正成再進破足利兵

尊氏敗走落筑紫

主上從山門還幸京都

義貞義助昇進官位

兩官總慕基久娘

基久因邪曲被改補

以上

脇屋右衛門佐義助

北畠中納言顯家卿



新田四郎義重

新田越後守義顯



西園寺大納言公宗卿



北條刑部少輔時貞

名越太郎時兼



北條相摸一郎時行

上杉伊豆守能重



高武藏守師直

淵邊伊賀守義博

高越後守師泰



細川卿律師定禪

八尾別當入道顯幸



志貴右衛門尉朝氏

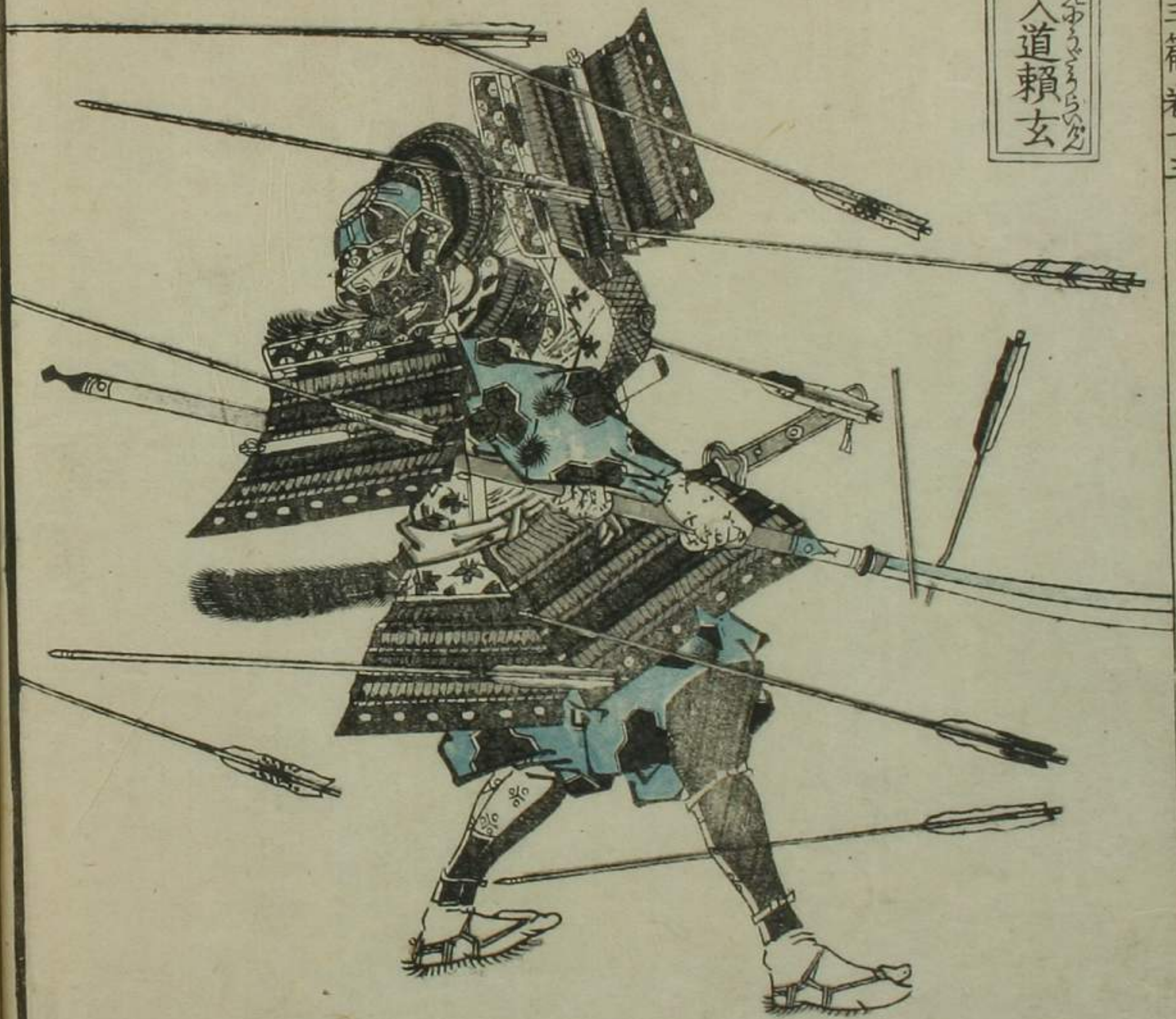
勅使川原丹九衛門 某

泣男 杉本佐兵衛

妙觀院因幡全村



野木與一兵衛入道賴玄



南北太平記圖會卷之十三

三篇

目錄

北山公宗密企及逆
 露頭隱謀官軍圍北山
 極罪文衡入道被行刑
 長年誠忠殺害公宗卿
 為探題直義下東國
 北條餘類蜂起東北
 直義奸計弒護良親王
 弒宮淵邊憶眉間入故事
 准后御口入再萌大亂

賜節度尊氏進發鎌倉

尊氏大軍戰新阪

平氏破而退箱根

鎌倉滅亡時行隱跡

直常下向而時兼亡北國

師直闕新田一族所領

義貞追足利一家給人

南北太平記圖會卷之十三

三篇

北山公宗密企叛逆

露顯隱謀官軍圍北山

故相摸入道の舎弟四郎左近大夫入道へ元弘の鎌倉合戦の時

自害しる真似とて潜り鎌倉と遁き奥州に潜る在る人

又見知れん事を恐れて姿を替還俗して京都に登り北山公宗殿

と頼奉て田舎侍の初て召仕り居る是も兼久の合

戦の時西園寺の大政大臣公經公關東へ内通の旨有し依

て義時其日の合戦より利を得り間北條の子孫七代まで西園

寺殿と可憑申と云置り今に至るまで他ふ異に思ひ成り

既又代々の立后も多し此家より出て國々の拜任も半ハ其族

よりの然バ官大政大臣に至位一品と極ずといふ事なり是偏よ

關東員負の高思なりと思はるるに。如何もして故相摸入道が一族を取立て再び天下の権を執せ我身公家の執政として四海を掌ふ握むと被思はれば左近大夫入道を還俗させ刑部少輔時興と名を替へ。明暮只叛謀の計略をのと思はるる。或夜政所の入道といふ者大納言殿の御前に来て申する。國の興亡を見るに政の善惡を見らるる。政の善惡を見るは賢臣の用捨を見るに。いづれは微子去る殷の世願。范增退て項羽滅る。今の朝家より只藤房卿一人のてあて候ひつる。未然に凶を鑑みて隠遁の身と被成候事。朝廷の大出當家の御運とこそ覺候急ご思召たせ給ひ候。前代の余類十方より馳集て天下を覆さんこと一日を出る。寸とぞとせむる。公宗卿實もと被思はれば時與を京都の大將として畿内近國の勢をくく。其甥相摸次郎時行

と關東の大將として甲斐信濃武藏相摸の勢を催し名越太郎時兼と北國の大將として越中能登加賀の勢とぞ被集ける。如此諸方の相圖と定て後西の京より番匠數多召よせて俄小御湯殿と作らるる。其はらと場は板を一間踏む落るやうに構て其下は刀の簇を殖置れ。是は主上御遊の為に臨幸を請り奉り華清宮乃温泉に准て浴室の宴をせめ奉て此中に入らんが為なり。加様よさま様の謀を定兵と隠し支度全く調ひられ。北山の紅葉御覧の為に臨幸成り。いさやへと申上られ。主上斜なり。御喜ひあり。て則日を定らば。行幸の儀式調ひ。己に明日午の刻に臨幸あるべき由相觸り。其宵の夜に主上且く御目睡りひたる。御夢は赤き袴は鈍色の衣着する女房一人忽然として来る。其左右に虎狼の怒らる。後には熊罩の猛き。りて明日の行幸をむ

思召留まらせりふべしとぞ申るる主上御夢の中ふ汝何なりと申す
者ぞと御尋させりふ神泉園の辺は多年住侍る者なりと申捨て
立歸ると御覧せし御夢の覚ふり主上怪しき夢あり明日の臨幸
を延引させしと被思召りまじも事既小定る上其期小臨く如何止
めらるべしと震襟を惱しむ遠く鳳輦を被促て立出ぬ去たぬ
ら夢の告怪しむれとて先神泉園を小行幸成て龍神の社の前小
至りぬ池水俄は變じて風吹かむに白波岸を打て頻り主上是を
被御覧弥夢の告怪しく被思召りまじ且く鳳輦を留めて御猶
預在りる爰ふ主上の御聖運や強りる西園寺殿の御湯殿を作
し番匠の棟梁家小歸て鬱々として煩へる如く何物思ふも其
く伯父なりる者小語て曰世に乱逆近きふあぶく候命自然の更も侍
むやと存候若我等が身の何如なる更ふ逢いとも妻子の事とこそ頼

と申べられと涙を流して語りぬゆぞ伯父怪しむ何更の有やと尋け
まば今何ぞ包む北山殿逆心ぞ勿躰かとも万乗の君を弑し奉
ん御企ありて此度然々なりと語り伯父これを聞て大に驚き臨幸
只今の程より汝参りて此事を返忠せよ幸ふ竹林院中納言殿へ
某参仕するにたつば汝の勿論妻子眷属皆罪せらるべし急々と騒
ぎ立伯父も共よ竹林院殿へぞ参りて中納言公重卿の如くとも知
りぬいほど為供奉とて花やうに立出ぬ所へ右の兩人参りて直に申
上る更のいと申入りぬ中納言殿驚きひ傍の人を退て聞
かふ不然々と申上る依て二人の者と留置其身の直ち神泉園へ
急ぎひ頼て主上の御前へ参り奏して被申す北山公宗隠謀の
企て有て臨幸を勸奉る由只今或方より告は是より急ぎ還幸成
て橋本中将俊季并小政所の文衛入道を被召て子細を御尋させ

ぞくと被^お申上^まりて君にも去^いる夜の夢の告^つ今日^{けふ}の池水^{いけみづ}の変^かむら
 熊^{くま}實^{じつ}の様^{よう}有^あと思^{おも}召^め合^あはれて急^{いそ}ぎ還^{かへ}幸^{さい}ゆ^らく則^{すなは}補^お正^{ただ}成^しを召^めさく
 此^{こゝ}由^{よし}かくと仰^{おほ}らむとされ正^{ただ}成^し少^{すく}しも騒^{さわ}ぎ宣^{せん}旨^{しめ}の御^ご使^し被^お下^{くだ}る
 ざし罷^ま向^{むか}ひと召^め捕^と来^きると申^ましと内^{うち}裏^らの更^{さら}も覺^{おぼ}東^{あづ}ちなれば逆^{さか}
 大^{おほ}内^{うち}の守^{まも}護^ごを仰^{おほ}付^つられ正^{ただ}成^し畏^{おそ}て即^{すなは}ち京^{きやう}中^{ちゆう}ふ在^あ合^あふ手^ての者^{もの}三^{さん}百^{ひゃく}
 餘^{あま}騎^きみて門^{かど}々^々と嚴^{げん}く固^こて内^{うち}裏^らと守^{まも}護^ごし奉^{たご}る皆^{みな}く有^あて高^{たか}氏^し義^ぎ
 貞^{さだ}と始^はりて京^{きやう}中^{ちゆう}ふ在^あ合^あ宗^{そう}徒^との大^{おほ}名^な馳^ち集^じて一^{いっ}万^{まん}余^{あま}騎^きふ及^{およ}びけ
 せども正^{ただ}成^しケやうの時^{とき}誰^{たれ}も左^{ひだり}様^{さま}の更^{さら}もせんも志^{こゝろ}れむとて勅^{しやく}定^{じやう}
 み候^{まう}ぞ禁^{きん}門^{もん}の内^{うち}へ只^{ただ}一^{いっ}人^{にん}参^{まゐ}られしと呼^よべし程^{ほど}は軍^{ぐん}勢^{せい}内^{うち}裏^ら此^{こゝ}
 四^し方^{ほう}を守^{まも}護^ごし奉^{たご}りたる北^{きた}山^{さん}殿^{でん}討^{うち}手^ての面^{おもて}々^々みも中^{ちゆう}院^{いん}中^{ちゆう}將^{しやう}定^{じやう}平^{へい}朝^{ちゆう}
 臣^{しん}小^{せう}結^{けつ}城^{じやう}判^{はん}官^{くわん}親^{しん}光^{くわう}名^な和^わ伯^{はく}耆^し守^{しゆ}長^{ちやう}年^{ねん}と差^さ副^ふて北^{きた}山^{さん}大^{だい}納^{なつ}言^{げん}公^{こう}宗^{そう}
 橋^{はし}本^{ほん}中^{ちゆう}將^{しやう}俊^{しゆん}季^き并^{なら}文^{ぶん}衡^{けい}入^に道^{だう}を召^め捕^とて参^{まゐ}るとぞ被^お仰^{おほ}付^つる勅^{しやく}宣^{せん}

の御^ご使^し其^{その}勢^{せい}二^に千^{せん}余^{あま}騎^き追^お手^て搦^な手^てより押^お寄^よて北^{きた}山^{さん}殿^{でん}の四^し方^{ほう}を七^{しち}重^{じゆう}
 八^{はち}重^{じゆう}も取^と巻^まぐる大^{だい}納^{なつ}言^{げん}殿^{でん}へ早^{はや}此^{こゝ}間^まの隠^{いん}謀^{ぼう}頭^{だう}をりりと思^{おも}ひのひ
 中^{ちゆう}々^々騒^{さわ}ぎとる気^け色^{しき}もち更^{さら}の様^{よう}も知^しりぬ北^{きた}の方^{ほう}女^{にょ}房^{ぼう}達^{だつ}
 めいこの如^{ごと}く何^{なに}あり更^{さら}にぞと周^{しゆう}章^{ちやう}をさめさ逃^{にが}倒^{たう}る侍^{しやく}共^{ども}も思^{おも}ひがけ
 なる事^{こと}をば防^{ぼう}ぐへ義^ぎ勢^{せい}もなく皆^{みな}うらえと逃^{にが}廻^まる御^ご弟^{てい}俊^{しゆん}
 季^き朝^{ちゆう}臣^{しん}も心^{こゝろ}早^{はや}き人^{にん}なりたる官^{くわん}軍^{ぐん}の向^{むか}ふを見ていも取^と巻^まをさぐるさ
 きふ後^{のち}の山^{さん}より何^{なに}地^ぢともろく落^お失^しりひる刑^{けい}部^ぶ少^{せう}輔^ふ時^じ貞^{じやう}も此^{こゝ}騒^{さわ}ぎ
 驚^{おど}ふて取^と物^{ぶつ}も取^と敢^{かん}を東^{とう}國^{こく}とさうて落^お行^{ぎやう}たりかくて討^{うち}手^ての御^ご大^{だい}
 將^{しやう}中^{ちゆう}院^{いん}定^{じやう}平^{へい}朝^{ちゆう}臣^{しん}と下^{くだ}知^ちして門^{かど}内^{うち}へ打^{うち}入^いり御^ご内^{うち}の人^{ひと}々^々と来^き悲^{かな}い
 ましめさせ其^{その}後^{のち}大^{だい}納^{なつ}言^{げん}殿^{でん}ふ對^{たい}面^{めん}有^あて穩^{おん}事^{こと}の子^こ細^こを宣^{せん}らむとれ
 む大^{だい}納^{なつ}言^{げん}殿^{でん}涙^{なみだ}を押^おへて宣^{せん}ひる公^{こう}宗^{そう}不^ふ肖^{しやう}の身^みありとゆふも故^こ中^{ちゆう}
 官^{くわん}の御^ご好^{こう}ふよつて官^{くわん}録^{ろく}共^{ども}人^{にん}に下^{くだ}らば是^{こゝ}偏^{へん}は明^{めい}王^{わう}慈^じ惠^ゐの恩^{おん}幸^{さい}

なりきる争つ居陰折枝汲流濁源志を可存哉情事の様を案むるも
當家数代の同官爵人ふ越恩録身に余間或へ清華の家是を妬
と或へ名家こそを猜で如何さま種々の諛言を構へ掃々の虚説を成
て當家を失んと仕る欵とこそ覺へてい下去天鑑真虚名何までも上
聞を可掠先召ふ随て陣下ふ参犯否の御糺明を仰ぎ候へ。但し俊
季ふ於て今朝已ふ逐電致しいと宣ひつる定平朝臣さこそ橋本
中将殿を隠し被申めてこそあれ御所中を能々見奉ると尤右を
下知しゆくへ數多の荒武者共殿中へ乱入る天井塗籠打やぐり翠
簷儿帳を引落して残る所もを搜して御湯殿ふ至る此度新くふ
造らまじと見へて其結構いふ計りある軍兵共内ふ入る隅々追改め
又床板を引放せば其下ふ劔を殖らまじり即こまを大将は言上し
るまじ定平朝臣大に怒りゆひ万乘の君を一旦ふ双をめりて貫んと

企し惡逆前代未聞くとて尚も嚴しく尋させらまじる依之と今まて
紅葉の御賀あべしとて樂絃を調づる伶人装束とも不脱東西ふ遊
迷ひ拜見の爲とて群と成る僧俗男女の内怪しくなる者召捕れて
刑戮ふ逢者も有り其辺の山の奥岩のまじりま逆若やと猶搜しり共
俊季朝臣遂に見へるまじり定平卿力なく公宗卿と文衡入道
とを召捕て夜中ま都へ引歸し即刻参内有て委細叡聞は達せら
まじればこそ湯殿の支度番匠の申ふたがへどとて西園寺殿の一跡
を竹林院の中納言殿に賜り番匠ま大庄一ヶ所給まらる

極罪文衡入道被行刑

長年誠忠殺害公宗卿

大納言殿を定平朝臣の宿所ふ一間なる處を攻宰の如く拵て押
籠奉る文衡入道と結城判官は預らまじ此上ハ別は可疑ふありま
とどども白状かていとて夜晝三日逆上つ下し拷問せられけ



太平記三篇卷十三

五

せども一言も申さず。既息絶ぬと見へる程なるに、雑色声とけ
 て入道殿を計隠て苦さゆひそ。御湯殿の下小劔を殖られり。上へ
 下へ入道泪を流して此上へとて残る所なく白状し。八公卿詮議
 ありて主上を斯失ひ奉んとまら。逆臣前代未聞の支あり。如之白状
 と見るに。供奉の御相雲客と悉く失ひ果さんとまら。の條重罪類ひ
 ならしとて。則ち六條河原へ引出して。首を刎らるる。公宗卿と伯耆
 守長年へ被仰付。伯耆國へ可被流と公儀已ま定り。明日必ず配
 所へ趣きゆると治定めり。其夜中の院より北の方へ被告申され。北
 の方忍びゆる躰めて位々彼へ行ゆ。暫く警固の武士を退させて。獄
 の傍を見ゆ。一間ある處の蜘蛛手結る中。小身を縮め。起伏もかく。位
 沈む。ゆひり流る。泪袖ふ余とて。身もろく。計も成り。大納言殿
 北の方と一目見ゆ。ひて。いと。泪ふむせ。び言出。給る言兼もなく。北の方

も。如何も成ぬる御有さぬ。とと斗り。泪の中。小聞へ。引らる。位
 伏の小良も。有て。大納言殿。泪と。押て。宣ひ。我身。引人
 を。な。捨。小舟の。如く。深き。罪。沈。ぬ。付。も。只。なら。ぬ。御。支。と
 や。らん。羨。我。故。の。物。思。ひ。如。何。あ。る。煩。々。御。心。地。有。ん
 ぬ。と。夫。後。の。間。路。の。迷。ひ。と。成。ぬ。覺。て。若。夫。男
 子。あ。て。も。候。末。の。支。思。ひ。捨。り。哀。の。懷。の中。小。人。と。あ。り。ゆ。へ。し。
 是。へ。我。家。傳。る。所。の。秘。曲。あり。見。ざ。り。親。の。形。見。と。成。り。と。玄。上
 牧。馬。流。泉。啄。木。の。秘。曲。を。書。ま。る。琵琶。の。譜。を。一。帖。膚。の。守。り。取。出
 し。ひ。て。北。の方。手。づ。ら。被。渡。る。番。の。者。は。硯。を。乞。て。引。上。卷。の
 紙。一。首。の。歌。を。書。ゆ。

哀。な。り。日。影。海。の。ま。の。影。此。身。ふ。む。ひ。を。あ。く。石。沙。の。毛
 硯。の。水。は。涙。落。く。薄。墨。の。文。字。さ。か。か。る。見。る。心。地。さ。消。ぬ。さ。小

これと今の形見とも涙と共々苗めり北の方のいと悲しと添られて
 中々言葉もなかりは顔とも不撻泣り去ちどに追立の官人
 来と今夜先伯耆守長年の方へ渡し奉て曉配所下し奉るべし
 と申すも頻々物騒しく成て北の方も傍へ立隠せぬひなる。さて今
 より後の御有様如何めと心苦しく透垣の中へ立給きて見ゆべし。
 大納言殿を請取忝らせんとて伯耆守長年物の具しる兵ども三
 百人計召具して庭上へ並居り余りよ夜の深ゆくと急ぐれば大納
 言殿繩取ふ引へらきて中門へ出ぬ。其有さゆを見ゆひなる北の方の
 心の中へとていせん方もあり。され流刑の度へ公証詮議ゆりて公宗
 の首と刎一類悉く遠嶋へ流し遣へさるべしやと申合されればも准
 后の御具負強うり々せぬ終は死罪をなごめて遠流は處せらるべし由
 定めて。長年よ預奉り伯耆の國へ流し奉るに極まる。正成此度と

聞く長年ふ申やう忠臣の必ごと君の為に死する是定るの法く
 今度公宗卿を御辺の預りみと伯列流し奉る由と聞り加様の
 人を助遠國に置奉らば後の代は如何ある為世為君よ悪吏が出
 来んをれば御辺何みとも鹿忽の様ゆて切奉を後み御咎あは
 某申開くべし。君更なかりざるに於ては為君死しとて思ひゆく余り
 よ御政道愚く見侍るぞと申すも長年云義を見てせざる勇
 ると兼る左の侍ららん我分國みと又や前亡の余類と集矢
 隠謀あらん更も煩ひあるべし。中院殿へ申談せばやと申捕尤も仕さ
 まへ余りに世の聞耳も恥くさ御政道なればと思ふなりと申すも
 長年定平卿は此由とも忍びやふ語る定平御捕と呼寄て密に評
 定あり後日の勅定の免もあらばゆきとて。相圖を定めてそまの言葉
 を聞誤りたる様ふして長年御首を切奉きて約定せらる。既も庭

上うへ小こ昇のぼ居ゐるる雲の簾を塞ふて公宗の御み乘りとのひろるる時は平朝臣の長年は向むく早と被ひ云はるると殺ころす奉まさすの詞ことばぞと心得こころえるる様さまあらて長年は大納言の殿のままとまりて支しりからて鬘かみの髪を桐で覆ふ引伏し腰の刀をぬいて御首のを搔落すぬ北の方は是を見みひて不あ覚あつとおめりて透垣の中に倒たれ伏ふ此俛へ頓とて絶え入りと見みへり女房達御車ふ扶た乗りてまま北山御殿へ帰かへ奉るさうも堂上堂下雲の如くなりし青士官女何地へ落おち行く一人も見みへず翠簾几帳も皆みな被ひ引はり落てあり常の御方を見みゆく月の夜雪の朝鳥は觸ふて詠よめり短冊も此彼ふ散ち乱れるも今いまはなき人の忘れ形見みと成なりてろろと涙を被催もる又夜の御方を見みゆく舊ふるさ衾の笛りて枕双べ人の面影はそをながく語りて慰なむ方もあく庭中紅葉散ちて風の気色も冷ど古さ梢の梟の声けうとぐ啼なる暮の物淋しさ堪てい何いかと

住すまひひろる北山殿の一跡と竹林院の公重御小賜らせりひろるとて青士ども数多来て取り貸へば是も別の憂數も成て北の御方を仁和寺の側は幽かる住所尋出して移りてある時もある所は故大納言殿の百々日小當りる日御産の支故もあく若君の生まれし時は昔なき御祈の貴僧高僧勸喜の眉を開き弄璋の御慶天下小聞へく門前の車馬群を可成し来の弓引人もなく蓬の矢射る所もなきあらる屋は透垣の風冷けも防ぎて陰も枯るぬき御乳人など被付までも不叶と母上自ら懐き育める漸故大納言殿小似りる御顔付と見みゆく形見る今はあらる是も忘れる時もある者と古人のあらるはしも泪の種と成り悲歎の思ひ胸は満ち産屋の筵も乾りあらる中院中將定平の許り使を以て御産の支はさて御ら

ぬ被仰出候事有若君も御渡り。御乳人小抱をて是へまづ入
 忝らせられしと被仰。母上あも心憂や故大納言の公達とむ
 腹の中までも聞て可被御覧と聞へ。若君出来させのひぬと漏
 聞へ。多うそ有る。歎の中も此子を育てこそ故大納言殿のこ
 まれ形見とも見若人となら。僧とも成て亡跡とも弔とせんと思ひつ。小
 のまご乳房も離ぬ。糸子と。武士の手ふかけて被失ぬと聞て有し別の
 今の歎は消果ん露の命を何よくけて。可堪忍あるを限の命とふ心ふ
 吐きのならぶ。かろ憂度とめ。見聞身こそ悲し。泣沈と。あひ
 乃と。春日の局泣々内より御使不出合ひて。故大納言殿の忘れ形
 見の出来させのひぬ。母上のた。あり。折節限。なる。物
 おのひは沈。その故。産ものひ。後幾。な。て。成
 のひは是も咎ある。人の種。如何ある。御沙汰。あり。逢。らん

と上の御咎と恐れく隠し侍り。被思召て。事ありぬ。行
 ま。偽ありぬ。此一言を。神小。けて。申入。と。泣々消息を
 書のひ其奥ふ

此は。を。乳。小。ね。く。の。涙。ふ。は。て。ぬ。袖。に
 使此御文を持帰りけ。定平御泪を押へ。奏聞を。経。ひ。つ。ふ。
 此一言と君も哀と。思召らん。其後。御尋も。無。り。け。は。嬉。し。さ
 中。思。有。て。焼。野。の。維。の。残。る。叢。小。雛。を。育。む。風。情。ゆ。て。泣。声。を。な。ゆ
 人。は。聞。せ。と。口。を。押。へ。乳。を。含。ませ。同。枕。の。忍。ひ。寐。ふ。泣。明。く。泣
 暮。して。三。年。を。過。し。の。ひ。御。心。中。こ。そ。悲。し。其。後。建。武。の。乱
 出来て。将軍の世と。あり。時。西園寺の跡を。継。北。山。の。右。大。将。実。俊
 御と申て。今の朝の良臣たり。吉野の新帝を。父。の。敵。の。御。末
 くれ。と。て。様。々。謀。を。廻。ら。し。終。は。赤。松。を。語。ひ。吉。野。に。忍。び。入。て。御。首

を給ひくろり。歌一首の感よ依く助置りいひぬ。末の代よ又父の敵
 とて新帝と討奉りし。浅間しかりし夏どもあり。これも歌の感れ
 る。あつた後准後の具員は。さう故よ助け置せりひらるとや。扱
 も故六納言殿の亡びゆへ。前表のありらる。と全頭孝重が兼て聞
 たりらる。社不思議な事。彼御謀叛の最初祈禱の為よ一七日北野よ
 参籠して。毎夜琵琶の秘曲を弾く。ひららる。七日よ満る。其夜
 の殊さう聖廟の法樂よ供ふ。さう為とや。被思らん。月冷とく。風秋
 うかる。小夜深方よ翠簾を高く捲上させて。玉樹三女の序を弾
 トのふ第一第二絃索々秋風拂松疎韻落第三第四絃冷々夜鶴
 憶子籠中鳴。絃々掩抑只拍子よ移る。六返の後の一曲誠よ嬰兒も立
 と舞計あり。折や。全頭孝重社頭通夜の心を澄し耳を側く聞
 くら。曲終と後人よ語らる。今夜の御琵琶祈願の御事有て遊さ

る。なると。御願成就。さうと後其故。此玉樹と申曲ハ昔晋の平公
 濮水の辺と過らふ。流る水の声よ絃管の響あり。平公則師倫
 と云樂人を召く。琴の曲よ移さう。其曲殺声よして。聞人泪を流
 さう。とゆふ事あり。然ども平公是を愛して。専ら樂絃よ用ひら。
 師曠と云伶倫。此曲を聞て難とて奏しける。君是と弄さびのや。
 天下一つ乱きて。宗廟全くと。如何となら。古殷の紂王彼淫
 声の樂を作く。弄びりひら。程をく。周の武王に滅さる。ひら。其
 魂魄猶濮水の底よ留く。此曲を奏さると。君今新よ移して。是をも
 て遊びのふ。鄭声雅と乱る。故よ一唱三歎の曲よ。あつた。と申くら。ら。
 果して平公滅らる。其後此樂を猶止む。と陳の後主これと弄び
 て。隋の為よ滅さる。隋の煬帝亦是を習ふ。と甚くや。唐の太
 宗よ滅さる。唐の末の代よ至て。我朝の樂人掃部頭貞敏遣唐使

ゆく渡りしより大唐の琵琶の博士廉斐夫逢て此曲を我朝に傳
来たり然ども此曲は不吉の声ありとて一手を畧せる所あり然と
その家の御法樂ふ公宗この手とひきつひし然も殺伐の声聞へ
つゝそ淺ましく覺え侍りけり音と政通と云ふ大納言殿此
御身は當と如何ある煩ひり出来らんと孝重歎て申るが幾を
無して大納言殿此死刑は逢ふ不思議成る前表なり

為探題直義下東國

北條餘類蜂起東北

今天下一統は歸して寰中無事なりと雖も朝敵の余黨猶東
國に在ぬ依之鎌倉小探題を一人置て思ふとし評議有け
るふ前の相州が一類を亡せ功あはせ義貞を下るべきと諸卿申
され君も實と思召所は高氏准后を以て被申入る鎌倉に
執権の夏内々新田は被仰付由風聞は元弘の時今東國の諸將

忠を以て一戦の内は高時亡びたりひき然るを今義貞が一類耳忠
賞は誇て別人の忠隱をて上聞は達せ守依之東國の士憤りの夏
有此人を執権とて中々東國乱の端となる又兵部卿の宮
に御事を去年直義預り申て鎌倉は奉下然も新田と兵部卿
の宮へ諸夏を憑奉る今其事をの親を奉る由聞え侍る若不思
議の夏もとて天下の周章なるべと被申たりし准后此由を密
に奏聞せられけり主上さて誰と宣ひは准后誰々と申侍る
とも直義ふあけの不可有と世賢きを申侍ると風は聞参らせ侍る
なご様々ふ申あげのひき君を最此義可宜と思召て内々の評
議を俄に引替させ給ひて當今第八宮成良親王十六歳よなり
のを征夷大將軍ふなり奉り且利左馬頭直義を執権とて
東國の成を司せしむる夏定り終は鎌倉に被下しとく

義貞もあしく此を傳聞内外の侍ども嬉しき事思ひたりよ。
 何とも不知直義鎌倉の執権小成と東國に下向し宮を供奉し
 参らるるを聞えり義貞方の人々へ世は本意をげ見たり義
 貞も色々の被出ゆども心中は片腹いそぞ思ひたり。准后の口
 入の如く一天下の政道を行ひのふ依り諸人の恨多く天下乱
 れん事近きふ可有と謂ぬ者こそ無りたる。かろ所は北山大納言
 殿御隠謀露頭して被誅めり。時京都少く旗を奉んと企ふ。
 平家れ余類共皆東國北國に逃下て猶其素懐を達せん事を
 謀る。名越太郎時兼は越中よ下て野尻玄蕃允高知といふ者を深
 く憑りて井口神保是より力して校本の城に措籠る其勢國
 中を押なびたりと聞へ能登の国も長九郎元正門温井覚田加
 賀の國も行間本庄富樫嶋津倉光の者とも及び越後の境な
 る魚津といふ所は推名孫六入道一城を構へ官方めて當國の國司

六条正顯卿の下代綴切刑部丞彼と一手に成る。その勢既ふ三千
 余騎越後の勢を待て校本の城へ寄んとする。所は大江田早川姫川
 の者ども四千余騎あり。今日明日のわざは魚津の城も着由聞え
 り。時兼大勢を待て戦ふに武略の不足のそ。ふ可落とて
 國々の勢を六城に置き置二千余騎を擧いで境川に出向川をこし
 と親不知といふ所後山前へ海あり山海を去事二十間も不過と
 ちを去ると十町ありて千五百騎を三ツに分て陣を張る千五百
 騎を山懐の内ある所は隠して陣を張る。大江田早川我勢の強大
 なるを頼て三町余狭き濱路を來る。先陣既親不知を越て三十
 間余も過ぬとあり。所は時兼が山の内に陣せし兵二軍に備てと
 事を發して先陣ふくけ入大江田早川が勢八十町余の外より引へる

三軍の敵こそ目小掛て難所を越る處ふ思ひよらざりし山の内より
 敵咄と時の声を発して直よかけ入りて溜もなまらず敗れけ
 り後陣の姫川大江田が輩返さんとまらに妻手の海あり弓手山
 かり長さ三町余りありて横二十間も足ざる狭き道を敵よ
 つ立ちきて先陣乱れ北かき進んとまら後陣の北も味方より
 多立られて一度は崩れ敗りたる時兼是を見り十町が外は扣
 てる三軍の備を不乱して進めば先陣の二軍千五百騎軍と乱
 て敵の中よかけ入て追結々々合捕高名数を不知時兼是を見て
 余りよ長追をせそそ二十町余り追立り引返り敵と討度一千
 餘あり井口の城は歸て上下気色なめて見えたる是より時兼弥威
 勢強く成て近國の諸將をぞ恐まされ魚津は籠り官軍追今
 へ叶ととて早々越後ふ引退く爰ふ相摸次郎時行の諏訪三河

守頼重が許り廻文を以て諸大名を相招きられ先一番小三浦
 介入道同若狭五郎判官葦名判官入道那波左近大夫清久山城
 守監谷民部大輔工藤四郎左衛門已下宗徒の大名五十余人或ハ
 高時入道の余類亦元弘の乱は義貞は随ひ忠戦あり者ども
 其賞なきは依り朝家をうらそ奉り故の如是時行は子して
 んがり左あは先國中へ打て出るとして信濃の國司博士左近少将
 入道殿の館へきよせ攻め少將入道の自害して失ひひり
 同國の住人木曾源七も馳むひ戦ふとて總の勢までこと不
 叶終りより負くひき退く是の目もけむ其勢七十余騎小
 く建武二年七月十八日上野の國へうち越りて那波左近大夫宗
 政の類并は國中の勢馳くると岩松次郎左五門恒家の蒸川よと
 せ向ひ一矢射く小勢なるは鎌倉へけ行るをよに伊豆駿河武

藏相摸甲斐信濃の軍勢招うさるふあつたりて五万余騎を聞
 えりり鎌倉ゆへ此由と諸方より註進をさりなむに宗徒の人々申
 上りりとも先上野武藏辺まで御出でて御勢を著合戦有べきと
 申し上りり直義下愚のとり沙汰強大なる小恐畏を用ひ申さ
 中も石堂刑部今御勢の集りしを善く御内外様合て
 三萬六千余騎あり是まて如何なる所まで程の大勢は對
 て戦ふとも御勢不足の有らざるさまで不被謂長評定のまて數
 日をわたりぬ敵辺境を奪はんむるぞ然らば鎌倉とて斯く
 有べし後戦の負するも耻まの守戦を可引を引ざるを
 りて將の耻と爲と申支あま上野辺まで出向て戦はん運此
 勝負有らんとしとせしと直義のいごとよ尤を宣ふぞ直義も左様
 の所をぞんせざるも非む先上野は新田あり義貞が手の者ども
 如何なる野心を容んむらん今敵は新田は属して元弘の合戦は
 忠をかせし者どもぞ何事有て時行は与りたる最覺東
 たり。風聞は敵は凡十万も有ぬらん味方ハ四萬もさる小勢ふ
 る定の勝軍はあらむ唯鎌倉は居かゝら東八州の兵を集て
 軍せんは勝て有べきぞかど。免角事を左右よせ鎌倉を出て
 戦んと露も思むるし終は淡川刑部大輔義季は向らるべし
 とぞ宣る義季は敵の勢強大とて而も東國の兵過半は
 通のよきを聞馳向て戦ふとも利ありと思むるれば善悪に
 つけ爰を最後と思ひ定て立まらる相従ふ軍勢五千餘騎七
 月廿二日武藏國女影原に馳著て四隊は陣を張らるる時行
 雲霞の如く大勢を押し来り先陣既は流鏑を射ちて火出るを
 ぞ戦る大將義季えより腹切らんと思定らるる事なりと自敵

如何なる野心を容んむらん今敵は新田は属して元弘の合戦は
 忠をかせし者どもぞ何事有て時行は与りたる最覺東
 たり。風聞は敵は凡十万も有ぬらん味方ハ四萬もさる小勢ふ
 る定の勝軍はあらむ唯鎌倉は居かゝら東八州の兵を集て
 軍せんは勝て有べきぞかど。免角事を左右よせ鎌倉を出て
 戦んと露も思むるし終は淡川刑部大輔義季は向らるべし
 とぞ宣る義季は敵の勢強大とて而も東國の兵過半は
 通のよきを聞馳向て戦ふとも利ありと思むるれば善悪に
 つけ爰を最後と思ひ定て立まらる相従ふ軍勢五千餘騎七
 月廿二日武藏國女影原に馳著て四隊は陣を張らるる時行
 雲霞の如く大勢を押し来り先陣既は流鏑を射ちて火出るを
 ぞ戦る大將義季えより腹切らんと思定らるる事なりと自敵

直義ちかゆき次つぎ計けい

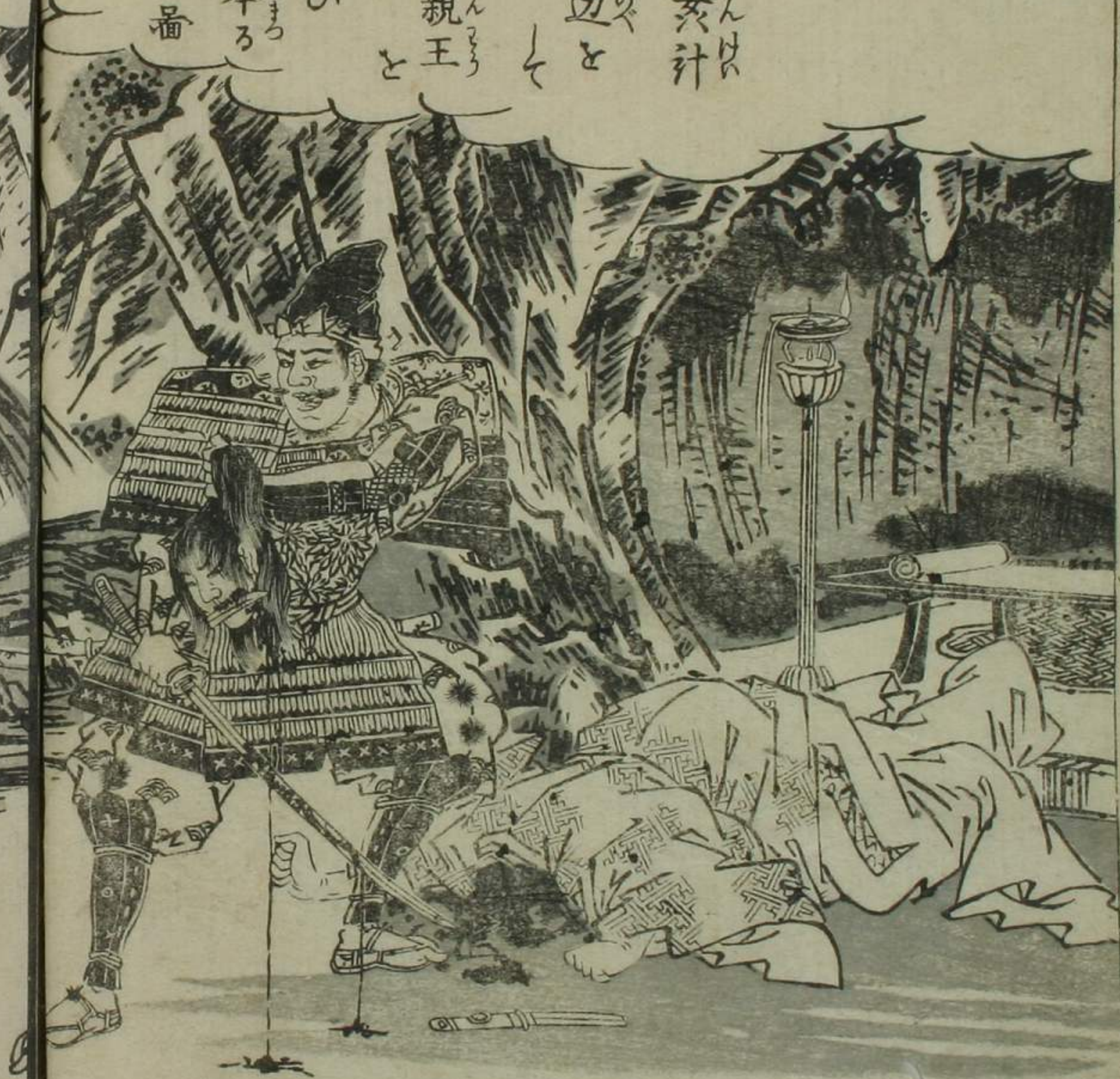
側わき邊へと

護まも良ら親ちか王みこと

矢やの

奉ほうる

番



相當了迄もなかく自害せんと仕わす所へ河原國小三郎手痛く
 戦ひしと見へく鎧ふ矢數多折りけ馳来り御方小勢めて戦ひ
 難儀なるより申々せむ是を聞て今度鎌倉を出るより死と途
 よ変ししむ驚へさふあらむと愁なる軍して匹夫の矢先よか
 んより自死を安くせんと思ふなり。汝への身も新参の者なりを
 見知ともも有すト急ぎ鎌倉へ馳参り合戦の体自害の様を
 左馬頭殿に申よと宣る。小三郎畏て御意とも覚へはず弓矢
 の道よ普代新参との事候もぬものを扱へ能々未練なる者
 思召し候々我且へ御心中恐耻入るは。とて御腹召し候々冥
 途の先駈仕らんと云も果さば馬上は腹を切諸軍の死め先
 達々義季是と見く感涙と流し侍の義を守り節は死さる手
 本なるを。ので去びとて帷幕の中は物具脱捨心閑は腹搔切西枕

みぞ伏しりひま石原五郎左三門尉惟義同九郎頼輔同七郎
 高貞板倉七郎左衛門尉泰宜子息弥七舎第七郎二郎同亦七大
 窪平五入道子息五郎舎弟七郎五郎三宮二郎同平四郎森戸
 次郎左衛門同与一入道子息弥二郎同孫五郎湯上彦七舎弟彦
 ハを始と。宗徒の人々五十余人中間既者以上百三十余人同
 枕は腹切て失はる去程ふ女影原の戦ひ御方小勢めて難儀の
 ち聞了ら直義重て小山判官秀朝一千余騎を助の兵あぞ
 差下さきさ秀朝は武藏の國府よ普て相戦ひしが是もささふ
 利をうくかある大将秀朝腹をうりし一族若黨五百余人自
 害を山川五郎入道義允も同國よて戦へが叶はんとて家の子郎
 黨百余人討死を上野の新田四郎義重へ鎌倉へ使者を遣り上
 野辺まで御出り當國下野越後の者どもを觸らるる。御手よ



属一戦も勝負を決しにぞと申すも直義は新田の者共
 の所存知をがう但義重が實子を鎌倉へ参せたるを一手に
 成て戦りんとぞ返答せらるれば義重是れをも如何に総領
 の義貞京都ふあつと君の御為無二の忠臣なり何れ依り今人
 質を出さんや懸る大臆病とのとよしては墓々敷軍をさるす
 難叶いと上野下野兩國の軍勢をあつめく四千余騎利根川
 を前ま當川辺を退く夏五十町ありて陣を張る相摸次即時行
 勝り乗とく義重を追罰せんと八千余騎を卒して馳向義重
 敵軍の備を見とささむるを軍の備陣の次第良将も非ど先の一
 陣敗せし後の皆一支もころも物をと四千餘騎を三ツみ分て軍
 を備へ前の武井十郎江田丹後守一千五百騎中の義重千余騎
 後の多井左近丞谷田兵衛千五百騎利根川を渡して八町を過

ころ時行ハ八千余騎を五ツみ分先陣二千余騎大佛貞元金沢右
 馬五郎と大将とて進める所へ義重が先陣武井江田の千五
 百騎矢一筋し不射咄と懸入りしむ時行が勢暫く戦ふと雖終
 散々不敗北寸義重大鼓を打く備を乱はぬ鬨を発して追懸るに
 敵の後陣一支も成ば散々崩れり時行ハ乱軍の中は旗を立て
 七百計の勢もて咄と叫て北る味方の中を二文字は取と返せば義重
 が中陣千余騎入乱と戦へ時行亦打負て引退く義重備を乱して
 追ふ夏四十里敵を討事数を知らば爰は三浦入道ハ府中川越の軍は
 打勝安中藤枝とて行る道を時行已は昨日新田四郎を退治せん
 と新田館林は発向とつて南無三宝新田の者ども弓矢取ごさんなれ
 一定不覚の軍仕て大将打負給願く軍終とる所へ我と遣し給
 いざや者ども義重を勝り乗思ふ夏なむも居らんむる所へ打越へ首

共凡切せさせんとて有合ふ者ども一千余騎鞭又鎧を合て馳至れ如
 案義重ハ軍小打勝少し高き所取上り。總二三百騎旗一流打立
 居より三浦入道曼を見く。其軍ハ勝たりなりと喜て北味々に
 目とくけむ前後二ツハ軍を備て直義重が陣は向く矢を發し技連
 と懸り乃身ハ義重ハ高より吐と懸落せ三浦が先陣一度追下さ
 せらるる後陣の兵入替と戦ふ。義重が軍勢忽閑さかびきて還く
 勝る軍を負より曼を見く先北より兵亦取返し時行ハ旗を
 立直して追まじめて討程ハ利根川へ追込めて討る。この數を
 知らば義重ハ四十里中ハ十五六度追返し合せ戦ひられども其身
 ハ餘多手と負て終ハ新田ハ帰り沼田の城ハ猶籠めると三浦と始如
 何思ひらん其終ハな置鎌倉さして進發を斯る。程ハ細川四
 郎頼貞入道ハ病床有ながら敵陣ハ馳向ひ其身ハ切腹し若黨ハ

皆々打死と時行數度の軍ハ打勝鎌倉ハ股肱の氏族耳目の
 勇士或ハ打負討死たり。諸國の勢追々ハ馳加り六萬余
 騎三手ハ分り三方より鎌倉へ押寄ると聞えし。直義ハ与
 して今まで鎌倉ハ在し人々聞恐して皆走り失し程ハ今ハ外
 様の軍勢ハ一人ハかり。只身を離れぬ。即後三千余騎ハ依之直義
 鎌倉よてハ軍難儀ちる。とて將軍の宮を取奉三河遠江までと
 志して落らむ。

直義奸計弒護良親王

弒宮淵辺億眉間尺故事

左馬頭直義既ハ山の内を打過めひる時訖と心付て淵辺伊賀
 守と近付く被申なるハ御方無勢や。力なき一旦鎌倉を雖
 引。美濃尾張三河遠江の勢を催して頓く又鎌倉へ寄ん
 ども相摸次郎時行を滅さん。夏ハ不可回踵。かくも只當家の為始

終離とあるべし兵部御の宮より今死刑は行ひ奉るといふ勅許
 もなかりきども此は只失ふに奉らむやと思ふなり御辺のいそぎ
 師堂の谷へ馳歸て宮を刺殺し奉と被下知るる淵邊畏く兼り候
 とて山の内より主役七騎引返しく宮の満しはしる籠の御所へ
 まりりたむば宮へいつし間の夜比如る土籠の中は朝は成ぬるを
 知らせぬを猶燈を挑て御経讀誦あそむして御坐るる淵邊が御
 迎はゆいりてい由を申て窄口を開き御輿を庭は昇居させり
 くるを宮御覽とて我を迎へく何地へ行ぞ定く汝も我を失せん
 との使もてぞあるらん心得りとい宣ふより淵邊が太刀を奪はん
 走りかきせぬひるを淵邊太刀を取直し御膝の辺を走るとは
 撃奉る宮へ半年計り籠の中は居屈らせぬひたりなむば御足心
 快よく立ざりりる故も御心へ八十梟は思召けども覆は被打

倒起舉人と志ぬひる處を淵邊御胸の上は乗かつて腰の刀を抜て
 御頸を搔んととも宮へ御頸を締め口を開て刀の先を去ると呀へさせと
 の淵邊志り成者かりなむば刀を奪むと引合るる間刀の切先
 一寸余りなむと宮の御口は残るる淵邊其刀を投捨服差の刀を
 抜と先御胸本の辺を二刀刺被刺と宮少く弱らせぬ體は見えけ
 る處を髪を咽で引奉て則御首を搔落し籠の前は走り出と明き
 所おと御くびを見奉るる噬切せぬひたりつる刀の鋒いす御口中
 は田く御眼なを活くる人の如く淵邊是を見とさる夏ありて様の頸
 とを主人あひ見せぬ事ぞとて側ある藪の中へ投捨ててそ歸りける
 御众錯の為は御前侍りりる南の御方と申女房此有さぬを見
 奉て余と恐りした御身もさくみ手足も立守只戦慄て坐りけるが
 志りり肝を静めて人心地付るる藪は捨る御首を取上奉るる

御層も猶不冷御目をも塞ぐせぬす。たゞえの御気色も見へさせ
 まへてこそ若夢もやと位悲めひる。遙に在て理致光院の長老か
 りる御事と承り及いとく御葬礼の御事取管せり。南の御方え
 馳せ緑の御髪を被落し位々京よりひひより抑淵邊宮の御首
 を取らるる左馬頭殿は見せせして藪の中捨る事聊思へ知在
 昔周の末は楚王と云る王武を以て天下を取ん為し戦を習ひ
 鈕を好む夏年久し或時楚王の夫人鐵の柱は侍傍とまみひ
 りるが地只なら夜覺て夫より懐任しひたり。十月をまごさく後
 産屋の席は苦んぐ一の鐵丸を産ゆ王曼を怪しとあひむ如何
 さまらも金の鐵の精靈るるべしとて干將といへる鍛冶を召さし此
 鐵もく宝鈕を作して進らまき由を被仰付くける干將此鐵を
 預りて其妻鏝鄒と共は呉山の中み入る龍泉の水は淬らして二

年ぐ内は雌雄の二鈕を打出せり鈕成といへる奏聞せざる前小鏝
 鄒干將は向て云らる此二つの鈕精靈暗に通し居怨敵を滅す
 るさ鈕あり我今懐任せり産子に必む猛く勇める男子ありと
 然る一つの鈕を楚王は奉り一つの鈕を隠して我子にまへめと申す
 る干將実もとて妻の言は分て其雄鈕一つを楚王は献しと一つの雌
 鈕をばいしと胎内は在子の為は深く隠してぞ置らる楚王雄鈕を
 見ゆふ誠は精靈有と見へる箱の中は被置たるは此鈕箱の中
 まで常は悲泣声あり楚王怪しとて其位故を問ゆふ群臣皆申さ
 く此鈕必む雄と雌と二つあるべし其雌雄一所は不在依てこれを悲
 んと泣者ありと奏しる。楚王大は怒り則干將を被召出典獄に
 官は仰て首を刎らまき其後鏝鄒子を産り面貌尋常のへは
 替て長の高き事一丈五尺力は五百人ガ力を合せてり面三尺あり

けむる世の人其名を眉間尺とぞ名付る年十五は成る時父の千
将が書置る詞を見るに

日出北戸 南山其松 松生於石 劍在其中

とあり。扱北戸の柱の中は靈劍在と心得と柱を割く見るに果
て一ツの雌劍あり。眉間尺是を得て哀れ楚王を奉討父の仇を報
と思ふ。骨髄は徹まり。楚王も眉間尺が憤を聞かひく彼が世は有
程の安らげと被思われ。数万の官軍を差遣して是を責らるる小眉
間尺一人が勇は被摧又其雌劍の双はふまゝ死傷する者ゆく千万
といふ數を知らず。斯る處は父干將が古の知音ありる。甌山人と云者
眉間尺は向く申様我汝が父と交を結ぶと年久しき然其朋
友の思を射せんが為汝と共に楚王を可奉討とを可計汝父の仇を
報んとならば持所の劍の鋒を三寸嚼切て口の中は含んぶ死むと。

我汝が首を取て楚王は献せ王悦で必む汝が首を見らん其時
口は含めり劍の鋒を楚王は吹けく仇を報ふべと云る。眉間
尺大は悦て則雌劍の鋒を三寸嚼切て口の内は含む自己が首搔切
て甌山人が前みぞ差置る山人眉間尺が首を持て則楚王は献る楚
王大は喜んで是を獄門はかけらるる其首三月迄不爛瞪目切齒
常は齒喫をたりる間楚王是を恐るて敢て近付むこれを鼎の中
に入七日七夜迄ぞ被煮る余りよははよく煮らるて此首少く爛て
目を塞たりるを今の子細ありとて王自鼎の蓋を開けて是を
見かひる時此首口中は含めり劍の鋒を楚王はまろくと吹け奉る
鋒誤む王の頸の骨を切ては楚王の頸忽ち落て鼎の中は入
りたり楚王の首と眉間尺が首と剪揚る湯の中は上より下はな
り喫合るるが動むる眉間尺が首は下は成り喫負ぬく見えり

を甕山人自己が首とくき落て鼎の中へ投入眉間尺が首と相とくも
 は楚王の首を喫破て眉間尺が首に死して後父の仇を報ぐぬと呼
 たり。客の首の泉下は朋友の思を謝しぬと悦ぶ声して皆苦き煮
 だまて失ふたり。此口の中は合言する三寸の劔の燕の國は苗て太子
 丹が劔とあり太子丹。荊軻秦舞陽をして秦の始皇を伐んとせし時
 自箱の中より飛出ど始皇帝を追奉りし。藥の袋を投げけらばな
 がら口六尺の銅の柱の半を切て遂は三寸は折て失くしし。七首の劔と
 きりり。其雌雄二つの劔は干將鏌鋇の劔といふもて代々の天子の寶か
 る。陳の代は至て俄は失ふたり。或は紀天は一つの悪星出く天下の
 妖を示し車有張華雷煥と云く二人の臣樓臺は上く此星を見ふ
 又。舊き獄門辺より劔の光天は上く悪星と闘ふ氣あり張華悦く光
 の指を所を掘せく見る。件の干將鏌鋇の劔土五尺をりの下は埋

れとぞ有る張華雷煥是を取て天子は獸んと雌雄の劔を帶し
 延平津と云沢の辺を通りくる。劔自ら技て水中に飛入る。雌雄
 二つの龍と成て遙の浪にぞ沈む。淵辺ケヤウの先蹤を思ひたれば
 兵部卿親王の刀の鋒を喫切せがひく御口は合言をみて龍馬
 頭殿は近付奉らんと其御首を藪の傍は捨るとあり
 准后御口入再萌大乱
 賜節度尊氏進發鎌倉
 直義朝臣の鎌倉を落て上洛をせしむる。其路次は敵追来て
 七月二十四日の合戦は淵辺伊賀守義博を始とく。南弥三郎宗常寺
 岡三郎左衛門入道孝純横瀬茂三郎入道覚蛭村上八郎行澄等討死
 其外創を被る者少く。後かたはる所は宗徳と頼基たる三浦入道
 了存長江八郎左衛門入道栄遍示時行は馳加たり。幼き將軍宮
 并は千壽王丸を具足し申され。今此合戦の急なる処は悪

かりぬぐし迎先海道へ引退さ給ふ駿河の國入江莊へ極たる難處
 たり伊豆駿河の軍勢心變して若道をも塞つらんと士卒皆是を
 危めり是は依て其処の地頭工藤入江左衛門尉春倫が許へ使者を
 遣はして其處を宣うり公も春倫一族を集是事如何有べきと
 意見を向々一族皆申々る鎌倉再興の時至ぬと存候只左馬
 頭啟を討奉りて相摸次郎殿へ馳参らんとぞ申る春倫頃く思あ
 んして天下の落居愚蒙の我ホ知べき處はあらず但義の向ふ所を思
 入江の莊に相傳の所領なり今春倫に至る已は十三代ぞ
 然るを相州禪門近年當莊を押領せしむる條存外の處は一統の御
 世と成り法勝寺上人信亮申沙汰有て論旨を拜領仕と一家を
 養ふ事是天恩の上猶重を重なり此時争り傾敗の弊は棄て不
 義を致さず一門の人々心々たるべし春倫は於て一人なりとて宮

方又参りて腹を切んと打立々る一族等実もと思ひ皆同心け
 る家々火を懸興津宿み御座有る宮の御迎もを参りける
 二十六日亦敵追來るを酒匂宿み防戦て監嶋三郎嘉久八条四郎
 守宇已下討まよる其ひに宮を御馬も乘せ奉り吉良左衛門佐満
 義上杉伊豆守重能細川兵部少輔頭氏同舎弟律師定禪高美作守
 師秋仁木次郎四郎入道行應同民部大輔義仍同六郎忠長父子三人を
 始とて狗庭原へ打上と給ひり角て手越宿を宮の御陣も召ま
 り同二十八日早且多湖與津由井蒲原世戸湯原已下の國人等
 雲霞の如く押寄り細川兵部少輔頭氏卿律師定禪同舎弟弥
 四郎仁木次郎義長八条左近大夫義言中金孫次郎季通賀子十郎
 義俊以下馳向り拒ぎ戦ふ定禪の舎兄顯氏の前へ進出大長刀を
 横之下知り敵の大勢官軍の小勢なり敵は後を圍まな笠

驗を守て引組で勝負ひ決せよ定禪後續るるぞとて四方を
 斬と旋りく若子の大勢を颯と追散し其身へ創を被るるが
 ら勝関を作と各馬をを休り。い程もな大勢亦押寄り是
 と見く今度へ上秋伊豆守高五郎左衛門一駢懸つと見ゆ各の姑
 御覽以とて懸出り佐竹石堂も續と敵味方追つ返り攻戦ふ
 かつるる所は清水五郎左衛門尉實宗と名乗る鎧の服立を腹にあ
 て馳廻り馬の前足を切折を三ツ足まで歩せ我身も左の頬を
 小耳の後へ切附らる引手の乳の上を突き血面めて栗生六郎入道
 道機も又錯せらる御方の陣は引返りて左馬頭一騎當千と感
 ト給ひり角と参州矢矯陣を取り暫汗馬の足を息め京都へ早
 馬を立ちまゐる。京都まゐる直義鎌倉も有し時より諸卿議奏し
 東國へ討手を下し時行を可被罰しとを申誰と可下と諸卿中

評定有と元弘の戦は鎌倉を亡せし義貞なり然も義貞を被下
 けり評議一箇は定比ふ君も可然と思召良辰を撰んで新田は仰
 付らまんと御気色あり依之義貞は親き諸卿の中より内々其用意
 しわらむと宣ひこれ義貞も此事は些色を直し元弘の大忠のもの
 どもに此時こそ少の所領ありと申とんと被思る所は准后此
 事を聞かひ密に奏達せしをなると実にて侍りやん新田は節度を
 給ひて東國下向のよと承る大は悪侍り元弘合戦の時分
 東國の者ども御方と与し忠戦を成し者幾千万ぞや然も義貞
 我忠計をのりとして他人の事を上聞は達せし偶申上るもあま
 ど事正路はあはれ此故は縁有者へ高氏を以て申上り自ら押し申
 する所あり依之東國の士皆彼を恨るの意あり然も東國士新田は属
 せん事有べし其上彼男功の少きを顧む賞の多かりん事をのぞむ

大よ悪事ニツ侍るものと高氏を被下るる東國の者ども皆思ひ付く
 御方よ属し侍る一又直義鎌倉に在る新田との不和の事侍るを而將
 争ふ時の事あるはと承りてと被申す多し君実もと思召て重て
 諸卿へ被仰るる思召替る事ある故又是利高氏に此度節度を被下
 ちり。義貞へ京都よ苗く朝家を守護せんと被仰下るる義貞
 大よ本意なく被思る則勅使を以て此由を高氏へ仰下されけり
 高氏勅使又對して被申るる元弘の乱の始高氏御方よ参りし依
 り天下の武士皆官軍に属して勝事を一時よ決しひひる。あるは
 今一統の世とありしに偏は高氏に武功と云べ。抑征夷將軍の任に代
 代源氏の輩功よ依り其位よ居る例奉て討るるは此一事殊に
 朝の御為家の為望と深き所なり次は乱を鎮め治を致し謀を以て
 士卒功ある折節は賞を行ふはあくいあり。若し註進を経て軍勢の忠否

を奏問せば奉達道遠して忠戦の輩勇を成るるは然れども東八ヶ國
 の管領を許さる直軍勢の恩賞を取行ふ様は勅裁を被成下い
 る。夜を日よ継でするり下り朝敵を退治仕るべきめては若し此兩条勅許
 を蒙らばせんが關東征伐の事他人よ可被仰付いと被申る然りと
 りども此兩条の天下治乱の端を身は君も能々御思案ありせらるる
 事を申請る旨よ任せて無尤右勅許有るるを始終如何とい覺
 えたり。但し征夷將軍の事へ關東靜謐の忠よ可依東八ヶ國の管
 領の更へ先子細有るるはと則倫旨を被成下る是の事なす守か
 たぐりなまも天子の御諱此字を下さるる高氏と名のりる高の
 字を改り尊の字よ被成る尊氏卿東八ヶ國と管領して所望
 たりやましく道行て征夷將軍の事も今度の忠節よ可依と勅約有
 けり。時日を不問關東へ下向の用意専らなり正成此事を聞し舎

弟正氏子諱るやうの代の乱再び起らん事近きよあり朝敵は足利兄弟より了東國へ發向の用意内々仕れと申されり正氏云某ハ左と不存候遠き東國の事ハ勿論よ近き播磨へ發向の御用意せさせゆへと申々々正成謂むして首をたせ大息ついとぞ居らるる々々かくと尊氏ハ吉良兵衛佐滿義を先立と我身ハ五日引さかして佐々木佐渡判官入道道誓を海道の先陣と々々其外伴々々人よの吉良上總入道慈仙足利尾張守高經昌山上野介高國三浦下野入道道葦同織部佐高與大多和太郎兵衛乘續佐々木備中守時信近江六角判官同加治源太左衛門鎮信結城七郎左衛門尉千葉久貞胤守都宮遠江守公利同三河守土肥兵衛尉實勝同次郎實元足立安藝守遠宣長井治部大輔時晴小笠原七郎左衛門義充武田駿河守政義土岐伯耆守秀教同美濃權守頼廣同兵庫助

頼長同彈正少弼政利遠山尾張守頼之高右衛門佐貞信同伊豫權守仁木伊賀守頼章同大膳大夫頼任細川阿波守和氏同右京大夫義氏同玄蕃助尹隆同八郎隆友上野左馬助義兼上杉彈正少弼朝定同兵庫入道道勤同大和守定包縮毛修理大夫幸富葦田官内少輔義方河野讚岐守通孝山名右京亮正杜京極出羽前司秀邦葦名七郎匡親長尾左衛門府生敏藏南條左衛門佐宗喬南大内記利純上杉畠山一族を先々出京の勢五千余騎八月三日關東さうて發向せらるる路次近江美濃尾張三河遠江の勢馳付く同六日矢矯宿よ着ゆひ々々時ハ三萬余騎とぞ成直義と一手よ成らるる所去ル七月廿三日女影原まで討死し給ひ。彼川義季の長男幸王九が許より石原入道空圓を以て打死の實名と註進し々々直義委細よ是を披見して感涙を押しさるる消息細よ書きて



源平兵を
新坂小
戦ふ
図

世のそえぬ流るゝ霧此草の蔭れゆひをらぬもぬも神
と書く彼遺跡へ流れて遣されたる哀もやさうりし事共なり是れ就
とも関東の進發を急ぐるゝとて五万余騎を卒し發向せらるる
けふ

評曰天子御諱の字を高氏と被下と尊氏と名乗せり事
時は取と宜しかり故語も天子の威をかきとりり君の威
不重と臣不敬臣不敬と國輕と國輕き時の天下賤しといへり
今天下草創の功を以て將軍の任を賜らば義貞正成長年等
將軍とあるべき者なり今尊氏は東八ヶ国の管領を許さるる
朝敵退治の命を下しと却と大なる朝敵の基を招くなり譬は
渴を養んが為と深き井を堀と却て井の水は濁と死するに等
し元弘の戦ひ尊氏御方は参りたるは依り勝るを一時は決

しつりといふ尊氏不参以前は東國武家の兵も次第は弱
宮方日々威を益しその根源へ捕り城落ざるは依り尊
氏の名越が討死のはゆゑは乗て御方は属しつる事天下の人よく
是を知り喻へ人の大旨作りたる家の今少く殘りたるを作りて
此家の我一人して立ちると云ふ似たり況や義貞正成圓心父子
長年等の諸將の忠を敗し其功を貪るる罪有と自の忠をあ
ぐる無礼過言の有さぬ尊氏が顔色如何もつらう厚面あてや
あつらんと傍の公卿の密に笑ひ申されしとなりまことのみな
らば折々准后を以て様々申入らるるを君実と思召されけ
る叡智の浅々しきより正成が未然の如く思ひあつらるる世とい
成はつらと云々

尊氏大軍戦新坂

平氏破而退箱根

去程は相模次郎時行の尊氏此度節度使と成り攻来る由をきき
 源氏も若干の大勢あらむきかれれば待軍して敵は氣を吞めて叶
 らば先ず時行人を制するは利ありとて我身の鎌倉小在ちがら名越
 刑部大輔を大将として東海東山兩道を押して責上る其勢三万余騎
 八月三日鎌倉を立んとし其夜俄に大風吹く家々を吹破り
 間天災を遁んとて大佛殿の中へ遁入各身を縮めて居りたり
 大佛殿の棟梁微塵は折て倒れればその内は集居る軍兵五百
 余人悉く歴は被打く一人も不残死より。戰場は趣く門出はなる
 天災は逢ひ此軍墓々かかると私語をきども。扱有るべき夏より孫
 心重く日を撰名越刑部大輔鎌倉を立く。夜を日は継り路を急ぎ
 間八月六日東國の大將佐夜の中山を越り橋本は陣をとり先
 陣は同日午の刻入坂は着敵府は有るをきぬと定て敵の大勢めて

そ有らん待り戦へて名越刑部大輔十古の里乃東よねめて勢を配
 置備を設侍りし処は葦名判官が曰く敵大軍して去るも天下の氣を
 吞し大将かれは容易は軍りては味方必利を失ふぞ。彼李衛公
 が秘しむひし奇正の軍術を以てせむんべ勝事難るべ。然れども味
 方必死の兵となりて敵の備を縦横無礙に懸破て尊氏兄弟の内へ
 と組で死かかんこそ本意あらめと。もがはしと軍と陶克は備へ侍る所
 謂陶克の備は味方の士卒を敵の方に向せしめて坐せしめ一足し
 中を懸破んが為なり如此前後の陣をかめ待りたる尊氏に當國
 の府は有て東國の先陣入坂は陣取るを聞め六韜の十四變は敵經
 長途來急可撃と云へり是太公武王よむる所の兵法なりとて翌
 日曉天直義先陣して仁木細川真藤石川野中二万余騎して押寄と

東國の先陣へ三浦入道那波左近両大将として山口伊藤武者の軍勢一萬五千まで堅ゆる所へ直義軍を三ツ分けて直は懸上りたるも三浦入道是を見く直義が中の陣已に阪より後陣へ未だ引へると覺へし時太鼓を打て軍を進むるに三ツ分ける東國勢先陣の敵は向ひ中の陣へ左の嶺に立後陣へ二ツ分を旗頭兩に分て數餘多よ見ろ程は先陣の一軍五千余騎咄と時を作大山の崩が如く直逆様は落し懸上りたる直義が先陣立足しかく乱て中陣へ北かゝる爰は直義近來其あつた武勇のけ多きを有と撰で馬廻りよ七千余騎にて引へ上りたるが先陣の大勢北懸つて陣を乱し前後混乱を敵へ坂より追ひける程は亦後陣の兵も一度は崩るる三浦入道へ十余町後よ尊氏大勢まで寄來うを見く返鼓をうつそ長追かりそと下知したるも那波左近は唯追へる程北かゝる敵を追は

と謂事やあるとて進鼓を打是故よ東國勢の陣残り追行て三浦が良従の残苗より三浦入道是を見く橋本菊川の陣よ人を遣して其陣の兵を此嶺を取らると軍の勝ぬぞと軍使を立ちらに諫訪祝部陳を進んと云々とも名越金沢の不進と謂て時と移も其間よ尊氏三万余騎を九ツは備て押來り先陣の一軍那波が陣の乱る中へ直はかけ入る程は那波が陣暫戦ぞと見へしが立足しかく崩れ引たる爰は三浦入道は軍を負ぬぞと思はるる我下知は随ふ兵三千余も在るを山の半途は下りて岸の境險き處を前よ當射手を左右よ進ませ待居らるに尊氏の先陣高左衛門師直兄弟二軍の兵六千余騎よ入替々責上るを三浦が左右よ立ちり弓の兵よ射立させて逆様は懸崩々々なりたるは師直兄弟は道より殿よ少く小高き所の在る兵を立ち足輕を進

せて入替責まゝ此間三浦橋本の陣は使を遣し路の嶺を敵に取
 まかす先陣の味方一人も生かす者非し其嶺を軍兵を寄ら
 れんと催促せしむるも諷訪金沢争うて来らず辰の始より軍を
 つく未の刻は成ぬ時は那波の散々懸被成八十騎計めて照の嶺を
 引かかすも尊氏前陣細川兵部を追ひて照より上りて三浦が勢
 を弓手は見成し那波を追討高兄弟と氣を得る時を作りければ
 三浦が兵の臆しる者又ハ手を負ふる者ども備をのれし引とを見
 へし頃々傾き傾て北散ぬ依之師直兄弟息も不継追挙る又
 細川が後上杉治部少輔八百余騎まで進々三浦の陣乱るを見て
 横は合て懸入し討る者數を知らず去ども三浦入道は百騎計を随
 て少し敵の左右なく上り難所まで取て返しと戦々も依る多く
 の味方助り斯く三浦菊川の陣と一所は成る今一戦と思ふ所は

諷訪敵をくまよ受てハ叶ふも佐夜の中山よて支めとて我
 随ふ兵六千余騎を引取く佐夜の中山は取上る金沢も我一人よて
 さへ難しとて同く引く行ければ三浦入道橋本に至り獅々の齒
 らをなす大臆病の者共を跡に置不思議の負を仕る事の無念さ
 らし。三百騎計まで旗を立て猶も今一軍せんと待つけられども師
 直の後は新手あり味方疲ゆる敵へ入坂は取上る尊氏直義も坂上
 の陣を調々れば三浦も佐夜の中山指く上りたるを見く高仁木上杉
 の人々唯押く中山の陣を責破らんとせしむるも三浦小高知は上
 りて道を中し一射手を進く待懸たり上杉ハ即直は北敵は追續
 て上りんと仕れば三浦爰まで我討死せむ味方爰も支へば
 とて散々射下し上杉が兵少くしつゝ西へ咄と懸るも上杉が
 兵足をもたぬ敗るる三浦返し鼓を打て長追せむ高九衛門わ

を追拂く中山は敵の足をとらぬなると三千餘騎を懸けたり
 を諏訪祝部佐那田の者共引直ぐ取て返し戦たれば師直が兵今朝
 と三浦と數度の戦は疲るる上懸立らして大勢被討て引退けい
 其日の申の刻は成ぬ斯而其夜鎌倉方へ佐夜の中山は陣取て金
 沢那波大佛赤宗徒の人々諍して曰く今日の軍は味方の風情を見
 るに明日爰まで戦ん事叶ぐく大井川を前より當て可防なると謂
 するを三浦入道是を聞て拙き人々の宜様哉昨日の軍は己は勝ぬ
 るものを橋本の陣を新坂へ寄らしむるし故よりそ味方不慮の負
 を仕てんぐり。明日此陣へ敵の寄来んま善き擒めんと事しな
 がし申さるるれば諏訪祝部最めて明日の合戦は某先陣仕侍な
 らん入道殿の後陣まで下知せむ勢のくと謂ふ入道諏訪殿佐那田殿
 先陣を渡り侍る某が者ども今日の合戦は多く創を蒙又被討候

明日後陣は引かんと申すと金沢が曰く今少境を引退き軍勢の氣
 を扶けて勝かん明日の軍は若御方討負かす後は大井川ありむ
 一人も生く少る者へあはしといふ三浦は河を大井川は水の出で人
 の往返も留まらぬ大臆病の者共不道所を知り少く少く勇の出来ん
 せらんとといふ金沢扱へ御辺某を臆病者と仰い哉明日の軍は誰
 々もを得る進ばばば先陣を某と申さぬそ三浦打笑て實は
 殿の臆病はありせむつと謂ふあらず左様の御心の付多しと存る
 所もあり金沢殿先陣を被遊んとならば諏訪殿は二陣は續りて諏
 訪は某を先陣と存せられども金沢殿御所望はもめては某二陣
 まで候と申。因是二途は合戦と決する明は八月八日尊氏方はい
 評議して曰昨日は高家の二類手を被碎上へ今日へ上杉細川仁木の
 人々先陣して軍を仕らんと候。卯の刻は仁木の二類二十人其勢

二千五百余騎諸國の兵都合六千余騎真先は進ぶ橋本より
 三手は成て上りたるより高家又先陣の御方弱く入替んとて新坂の
 半は兵をわたりて二陣は進む都合其勢八千余騎なり細川一類
 十八人其勢三千六百余騎諸國の兵都合して七千余騎もく北比
 峯々を取て後へ回ると杉二類八人其勢三千余騎集り勢都合して五千
 餘騎細川が二陣は備ふ尊氏二万餘騎兵を九よ分て新坂の峰々備
 を堅め軍を張り鎌倉勢の先陣金沢九郎三千余騎軍を二つに分
 たり。次は諏訪祝部六千余騎九よ兵を分て軍を張り二浦入道
 は昨日の軍は討残されたり兵二千余騎まで佐夜の峯は前後二つに分
 る備より北の峯續へ敵の回ると見へれば名越二条五千余騎まで進
 んどり。是も兵を餘多に分て細川が取る對の峯は陣を張り昨日
 日軍仕てんたり兵落失く三萬騎は少く不足程なり名越刑部

大輔の惣大将として佐夜山の後金谷の北の峯は一萬餘騎まで軍を
 餘多は張りたる。されば仁木が先陣軍を堅く佐夜の中山は登
 んとて進み金沢先陣下りさぐりて是を射る追上追下二三度程戦
 めり金沢の先陣は射手多かれが寄手餘多射らば後より上り
 んともせむと互に詰寄り矢軍は時をうす。細川が向る北の手も
 鎌倉勢の小勢かれが陣を不被破を勝と思て出で要害なれば細川
 も不懸是も矢軍計仕てんがり。かくて己の刻の終も成り尊氏
 を退屈しく見へし所は直義鎌倉まで敵の旗をたれ不見し北より
 と諸人笑めて扱る上昨日の帥拙く御方よ笑をさる直義
 も面目なく思家子良従も余り無念と思われ二万余騎まで新坂
 より南山の道もなす所を廻り兵を進て軍を分る事十八より
 金谷の宿の南の上名越刑部が居たり向の峯は對の陣を取て弓

の兵を指下して射さむ追手へむひし金沢中の陣直義が南の山へ廻るを見く如何思ひん陣中周章て兵の声なき備乱て々も仁木が後よ備する高右衛門師直空時を作陣を色免し已寄懸て責べき氣色見へる仁木が兵弥進で懸合る金沢中陣足もたぬ散乱も仁木猶も氣を得て責上る程は金澤が先陣暫く支え戦々も共是も同く崩れ多り諷訪へ去まば了を若き金沢が帥斯るを思事よとて我軍の備北入をば如法度打捨谷よ追落し道よ二軍を張出して戦へ仁木が兵散々も乱れ是も谷へ追落されぬ高師直是を見く新坂の東半分も引らる直逆様も懸落し々も諷訪が軍勢又懸立らるは諷訪手勢八百余騎まで返し合され師直鼓を打て軍を橋本へ引入北へ回りたふ名越右京進が兵追手へ味方負きりとや思ん何とら小事も無

ひ引崩て名越刑部が本陣も苗ら次川原へ打下し大井川を渡して遁しを細川兵を二つに分一手は名越右京進を追一手は諷訪懸合ふ諷訪已よ討まぬと見へる三浦入道一千余騎まで横合ふ會て細川と戦ふ是立何事も難所なる北も追つる多し討まぬ是此彼の谷々も落重て岩石古木も身を損て命を失ふの不知数三浦諷訪は使を立被引り某後陣はるどいつの諷訪師直が先陣を追拂て引んとすもどらも競懸りる兵の上師直後より進めさめと下知さる程は一足も引次乱れ合て戦は諷訪が兵多く討まぬ漸百騎計も成て引らる三浦も細川と戦て五六十騎まで引られ大将刑部大補早大井川を北越て川の向ふの峯田中の所々も間をら引へんが直義が勢川原も充滿して漏れ出べき様もなき後より仁木高上校細川勝も来て追かふ諷訪三浦一手も成り其勢三百騎計在しを下知して曰直義は日本一の臆

病者たつ川急引ける大勢何の用も立ぐ守我亦此勢を懸入らん
 小鳥千羽鷹一のちたるべし跡を敵目な懸そ何ぞ討破て川を
 渡り重く相列の御大事は會と下知し兵声々只討死はと申と
 大勢の中懸入し馬乗る者少く大畧歩武者かれは残少
 討きて川向懸上る去ども諏訪三浦の手も負此の陣を取らむん悪
 かりんとて諏訪の跡を留て大将名越と一ツは三浦の箱根を支んと
 三十騎計を相具して箱根の水飲峠を支たり尊氏の其日佐夜の中
 取上りし暫軍勢を扶て了とて又遠列國府へ引歸し是勝
 軍の仕しども兵餘多討てり故とぞ聞て去ば尊氏佐夜中山の
 軍は打勝亦遠列の府へ引るに依り東國の者共希有の命を
 助ける心地しけり諏訪曰明日尊氏寄来るぞ爰て戦んと謂
 しを尊名判官唯曲く三浦殿被引に管根まで退く戦あり侍を
 一軍負て其近辺を軍にせしめぬとたり諏訪免やせも角やあらん
 と思ふところ敗軍の兵集る一万餘も在らんと見ゆ何といふ夏も
 崩引し引る間大将名越刑部大輔も引退く程は諏訪も無力引る
 名越今度の軍は負る事最口惜く思ひ江尾まで戦んと議するが
 兵五千は不足管根へ使者を立三浦を呼評定せんとて使を遣しけ
 る其日の晩程は尊氏大勢を駿河の府中着ぬ又明日は是へ寄る
 志とあり翌八月十日卯刻は尊氏が大軍押来む名越此勢討りて
 戦を利有尙敷ぞとて引退く程は高橋まで三浦入道は往逢り
 彼是都合一萬余は成るれ爰て一合戦と評議は尊氏先
 陣高上杉軍を餘多ふて責来り味方の軍勢驚周章を見
 三浦手勢一千余騎まで前は進後陣を三浦は参せ侍ぞと云捨て馳
 向ひ態と矢軍の時と移して戦る其内は諏訪跡々の軍を皆虎尾の

一軍負て其近辺を軍にせしめぬとたり諏訪免やせも角やあらん
 と思ふところ敗軍の兵集る一万餘も在らんと見ゆ何といふ夏も
 崩引し引る間大将名越刑部大輔も引退く程は諏訪も無力引る
 名越今度の軍は負る事最口惜く思ひ江尾まで戦んと議するが
 兵五千は不足管根へ使者を立三浦を呼評定せんとて使を遣しけ
 る其日の晩程は尊氏大勢を駿河の府中着ぬ又明日は是へ寄る
 志とあり翌八月十日卯刻は尊氏が大軍押来む名越此勢討りて
 戦を利有尙敷ぞとて引退く程は高橋まで三浦入道は往逢り
 彼是都合一萬余は成るれ爰て一合戦と評議は尊氏先
 陣高上杉軍を餘多ふて責来り味方の軍勢驚周章を見
 三浦手勢一千余騎まで前は進後陣を三浦は参せ侍ぞと云捨て馳
 向ひ態と矢軍の時と移して戦る其内は諏訪跡々の軍を皆虎尾の

陣は備へし是の味方小勢なるが故なり。高左衛門透間在せを唯け
 よと下知しなむ先陣の二軍四千余騎直しなむ懸りなむ三浦も相
 懸りなむとて戦ふるを先陣師直が固る旗下は兵二千討も在る勢も
 て咄と呼んを懸りなむ東國の勢亦乱と敗しぬ名越刑部も
 爰まで討死と取返し戦ひなむと敵目も余程の大勢なれば終に討
 負箱根を差と引退くまで討と者數を知らず尊氏又續て追懸を
 へ東國勢箱根も足つくる間敷と尊氏の進んと謂直義の勝て驕らばと
 申度は是なりとて駿府へ引返しなむ翌日の軍兵を休てそ向へしことそ
 府中は滯留も晚より雨降て三日道不止し故尊氏不寄りなむ東
 國の敗軍の者共力を得て宮根も陣を固め東國勢一万三千余騎も
 箱根の坂半も支へ待し此山の海道第一の難所なれば源氏無左右懸り得
 とし思處も赤松筑前守貞範等命を塵芥より輕く義を金石

よ比して進み近づく東國勢も此と破らるる再び支ゆなき地なるも
 ばとして勇氣を厲し防戦も事七ヶ度勝負互ふかたり然るも貞範
 さうも峻しき山路をよびて足柄へ軍勢を分て廻り侍るを見く東
 國勢前後を圍も悪くなんと思ひらん此山をも越へ散々も
 成て引退く清久山城守返し合せと一足も引間るが源氏の兵も
 被組て腹を切も間も無らん其身の忽虜らも郎従は討しよけ
 り路次數ヶ度の合戦も打負て平家やけも思共不叶と相摸
 川を引越し水を隔て支へる時節秋の半なれば急雨篠をつくが
 如ゆくと河水岸も溢りかど尊氏も定て明日川を渡さると翌
 日の合戦の秤錢をて川辺を退く事八町もて川の辺右の方も伏
 兵を置源氏川を越て攻近く偽引とせ軍勢半過る程を伺ひ伏勢
 を起し相懸りて討破らんと構ふる今夜も源氏も川を渡すは

と油断して手負を扶助し馬を休めて居る所は夜に入ると高越後守二千余騎よて上の瀬を渡赤松筑前守貞範ハ中の瀬を渡一佐木佐渡判官入道道誉と長井治部少輔ハ下の瀬を渡平家の陣の後へ廻東西より圍を作懸て平家の兵前後を圍て叶ハトとや思かん散々ハ乱るを見と尊氏が大軍ハ引續く渡を程は東國勢度を失ひ防戦ふ事十二ヶ度及び源氏今川頼國ハ矢ハあつて川中討せらるされども平氏終に叶て候して鎌倉へて敗走せ

鎌倉滅亡時行隠跡

直常下向而時兼亡北國

爰は相摸次郎時行ハ其身鎌倉に在て諏訪三浦其外宗徒ハ人々を以て源氏の兵を支へんと思ひ一処味方橋本佐夜中山を打負ぬる由を聞て自身江尻高橋辺まで打出て戦を決せんとする

勢二萬余騎よて己は鎌倉を立てんとせしは新田四郎義重先敗の耻を雪ぐんと上野より発して其勢一萬余騎よて武藏まで打越しを申々多時行先進敵を拂てそよめと入間川は向義重夜中又川を渡して敵陣を懸破り時行は二萬余騎散々敗北して時行も命計助よて主従百騎計よて鎌倉へ落行程は義重北を追よて藤沢やが寄つる多時行残兵六千餘騎を集て極樂寺切通よて是を防ぎ諏訪三浦を待て戦んとする所は是亦尊氏は追討を名越刑部大夫をよめ諏訪祝部葺名金沢の人々此彼を討死しと行瀬腰越より落来る兵共と鎌倉ふ入て暫息と繼せ猶も切通よて必死と成り防戦中へ諏訪三河守馳来て父よて候祝部ハ行瀬は被討てる三浦入道ハ大形の討死と存れと泪を流某ハ二所よて討死と存れとと御事の覚束わらざる大勢の中を打破り幾陣を破りて

鎌倉 破 時行 跡 かくと 圖



待まらば手の者共皆被討て侍らなり其外の大將達大略被討つるとせ
 ぐい今ハ矢猛ハ思召共叶なきは非されハ尊氏ハ是ハ奈テ手の者
 諸方(田)侍らぬ前ハ一先落めハ但跡ハ残留て腹切らる兵なると
 殿落させめつて何國までも追懸奈らせんまをば某ハ御任せ
 へて猶本の責口ハ阿曾兵部を大将とて。数千騎残し置三列ハ
 時行を打連く大御堂の内ハ来り時行を始め宗徒の兵十騎計何
 事も落人の体ハ見せて奥の方忍せ残る侍十八人手の者以上三十二人
 腹切て堂ハ火を懸て焼失ぬ三列ハ未腹を不切腹を切らる者共ハ
 首を取集一ハ耳鼻をそぎ面の皮をそぎて後我身ハ自害して失
 れ後年尊氏朝敵と成り時曆應の末ハ時行北畠頭家卿ハ屬して
 勅免を蒙り尊氏ハ戦ひ時頭家卿ハ語りとなり去ハ捕正成首
 共の皮を剥たる由を聞かぬ時行ハ死せざる物なり時行ハ生たるとか

くさん為まを多くの首共の皮を剥らる也と縺り共義貞を始とせ
 宗徒の人々何れも適し侍らんとぞ只時行が首を隠さん為まを杯と口を
 謂き後主上吉野ハ在り時行ハ勅免を請を聞くと王上を
 奉始さるも正成が申つる事掌を指が如し時行ハ生て有てなり天晴
 勇士なるつる物を生て在んま天下の朝敵を亡して朕二度御代ハ立
 んまらるものと宣く御泪ハむせむせめりハ堂上人皆上衣の袖をそめ
 らされしとく亦三浦入道ハ尊氏の兵と戦わると後陣ハ引らるが新
 田義重が兵の大勢ハ支らるそ散々ハ戦ひ手の者皆討まると主従
 六騎ハ成笠印をかかると捨新田が兵の笠験旗を棄て郎従を歩
 立よなり其身ハ中黒の旗をさして高右衛門が兵ハ行達ハ新田
 四郎が許より尊氏(の)早馬の使たりと答て行深山ハ懸入て伊豆の
 府ハ出て江尻より船ハ乗と熱田ハ拳足らるを見知りらる者有て熱

田大官司生捕て京へ上せし君と此の判官司をればとて捕は是を預
 けぬ正成對面して親しくもてあつゝ軍の物語を細々とせさせし
 新田四郎が軍の事を語りし程もなほ一條川原まで首を刎ら
 れたる是而已まあり平家再興の時未だ至らざりらん又天命も
 ひらん名越太郎時兼が北陸道を打順へて三万餘騎まで責上り由
 聞けし義貞と討手は可被下由なきも北國は無案内なる上病氣出
 来と其身心を以て下らしむを扱置をきた非を維を評定有て
 正成と北國七ヶ國の管領を成して朝敵追伐の論旨を下されらん
 然善く准后の正成を強御惡と深くれば如何なる遺恨の者う在らん
 奏せしむるは正成の一天下は及びて死恐しき者なるを諸國を威を
 振るべ如何なる事も出来らんむるものを余の大將を命とめし杯
 ど准后を以て支へる事斯る時節は京都の事覺束なりと捕は帝都
 を守護し可奉と被仰下重て評定在るは挑井直常こそ可然と事
 既も定まり朝敵を亡くすべ越中一國を賜らんとの論旨を被下
 たりふ其勢は二百餘騎も過さしと見へるは捕正成直常が許し至り申
 さしはるは貴辺小勢を以て勅定は應に北國は下りしそ神妙は覺
 めし軍の成敗は老年の人も越ゆふ申し及む當時の人皆欲
 心深く侍も貧國人等も是をよと招きめか加様の者こそ用ひ
 思ひだんと沙金五百兩飼へる馬三匹引く此外は何もあれ用の物侍らむ
 正成が調侍も當時所領も不多人大敵追討の役は當らむものへ万は付
 て嘆ま心苦敷しそと申すも直常は荒夷まで心様物を給ひしそな
 り男なれば正成が下らんむる所へ我りなれば少人と思ひ笑ん為角さる
 なりと思ひ々も仰承りぬ去らざり此前より親もかく捕殿は奉功申
 する事も不待何故是を給らん哉と返しぬ正成の云良挑井殿善物

を守護し可奉と被仰下重て評定在るは挑井直常こそ可然と事
 既も定まり朝敵を亡くすべ越中一國を賜らんとの論旨を被下
 たりふ其勢は二百餘騎も過さしと見へるは捕正成直常が許し至り申
 さしはるは貴辺小勢を以て勅定は應に北國は下りしそ神妙は覺
 めし軍の成敗は老年の人も越ゆふ申し及む當時の人皆欲
 心深く侍も貧國人等も是をよと招きめか加様の者こそ用ひ
 思ひだんと沙金五百兩飼へる馬三匹引く此外は何もあれ用の物侍らむ
 正成が調侍も當時所領も不多人大敵追討の役は當らむものへ万は付
 て嘆ま心苦敷しそと申すも直常は荒夷まで心様物を給ひしそな
 り男なれば正成が下らんむる所へ我りなれば少人と思ひ笑ん為角さる
 なりと思ひ々も仰承りぬ去らざり此前より親もかく捕殿は奉功申
 する事も不待何故是を給らん哉と返しぬ正成の云良挑井殿善物

の意を申ぬへ貴刃を少人と見成ての事よあらば今所領杯甲斐と敷持給も人の勅定は依て北國へ思召立ぬあられ緒事は付く用の事多く侍らんれと存是まで少の軍用をも調へ給へ君の御為と存る道まで候某の此一兩年へ撰河の兩國を給り侍まば何事も付て不足さし是君の御恩より守我御刃と親侍りとも朝敵退治の器よ非ざらんば奉る間敷ぞ譬へ内々恨る子細在とも國の用よ立給もん人の用よ在んと見るならん何ぞ似合し引引出物を為ざらんば是全貴刃は送らば非ざ君の為よ恩を報むるをうたへ正成愚なりと雖全左様の私なりと結りたり直常泪を流して是と感引引出物を受用し其後北國の謀と細細と評定して下りぬ時兼へ越中加賀能登の勢馳加て三万余騎京都へ打上りし先越前を退治せよと大聖寺の城を一時よ責落しけり敷地上木山岸氏生深町の者共三百騎計は成り越前の府中へ引

退く處よ京より節度使楠が来ると風聞は在と未下らば何と在ことやんと思ふ如く正成の下守桃井次郎直常手勢路次の緒勢はつよりて二千餘騎まし下向と國人等案は相違してなり楠下向せを良将なるを以謀退治せん事最安らばと謂も思ひは直常纒の勢まで馳下りぬ何とて朝敵を退治まはさかんとはばやきなり。依之府へ集る兵も無りし直常楠殿の所方の夏在故よ不被下平愈の後を被下侍らぬ去正成下向十日の内なるべし直常は國中の勢を相集りしと被申たりと謂も軍勢是を聞くと扱軍は可勝ものとと色と直一六日の内よ馳集る軍勢八千余騎は成くなり直常諸大將は對面して云此勢在なると空しく正成を待て敵は難河越されなれば由々敷大事なるべしゆゑ足羽の辺迄打越敵の術を弑るべしとて八千余騎を卒し足羽は打越舟橋を切て川を前よ當相待り共時兼は來

去ばとて川を渡して其日八里を往く加賀越前の境細呂木と云所は著
 直常山岸新左衛門ふ談とて忍の兵を遣さ山岸は加州の住人なりたる上
 殊に忍の兵餘多持る故とぞ忍者歸り謂ふ軍勢は何万騎在らん強
 大の勢を以て名越殿の城より旗も見へ河川より向ふ陣を取り城より勢の程
 三千余も在ると見へこの城の此方の山々峰々は一勢を引分幾本と謂
 数を知らず名越が陣は川端三町を退先陣あり又其川城の山下より流
 出候城の向の端岸如何も高く侍るに一勢を指置く夫より山々は一
 勢々々軍を分て被置川を渡り名越が陣は懸らば横は落合よりの
 支度と覚へい京都よりの打手を待まるとそ存之と細々と詰る事
 へ直常はくぐくと聞くと時兼の前亡の余類の中は能大將軍とてそ覺
 ゆも小勢を以て被謀間敷陣の取様外と積り御方の無勢をり敵の多
 勢あり敵の陣の取様最賢なれば夜討は為さず術もたぐ。免やせは角

やせははと案じ居緒軍勢は對ての捕殿は何時分よ下りのゆんと謂
 亦正成の謀書を作て近日は可為下向由を國人も談し聞せて日を送
 々も共敵へ細呂木の難所あり待と戦ふとて不寄唯日々夜々五十
 騎百騎足輕の野伏を出て勝負を為させたるは大将時兼輕々敷出會
 て足輕の下知を仕る程は御方毎度打負たり。桃井是を聞くと夜を半
 時籠と兵を出し敵の先陣を去事半町もて未夕の刻は兵を発し
 先陣は矢を放と時兼も同時は兵を出し先陣は來て働を見ら足輕
 の兵百人計はなれば時兼も足輕を出し戦々が何思ひらん太鼓を打て
 兵を引上足輕の兵は向て繩様の汝も懸る事勿し敵兵を伏せるぞ先
 此方より懸る時何よりも足早は逃る懸る時甚速し是也又後へ兵
 回くるが二の内を以て不過とちり桃井の敵不出會は依り伏る兵を起
 立く引入ぬ曼を見と誠は賢き將名と皆々感とたり去は直常一の謀を

寮さか上木深町の者共ともは終しまて敵たけを在ある堀田助八ほりたすけの深町ふかまちが朋友ともく
 長九郎ちやうくわん九衛門くわん前田新兵衛まへだしんべゑ神部七郎かむべしちらうの上木うへぎが朋友ともなり此者こゝろ共何ともも時
 兼かねは随まく敵陣たけじんはあり上木深町うへぎふかまちが方かたより忍しのびぢりぢりは絹送ぬいせきをたる。當
 國くには足利尊氏あしひくわん節度せつどをたて下向げかうし遠江佐夜中山とほへさよやままで互まは陣じんを合あひ戦
 と決けまるとの刻とき東國勢とうこくせい打負宗徒うちまねむねとの大將たいしやう達餘多討たつたを給たまふ由よし告来つぐ
 所ところなり依よ之の捕殿とらでん所ところ勞快らうかいらばと雖な大勢たいせいを卒すし明日あした已やは帝都ていとを立たらる
 ろの往進ちやうじん在ある正成せいせい着陣ちゃくじんの後のちはよも其御陣そのおんじん支さへぬんたるは忍しのびぢりぢり事ことの
 由よしを告つる處ところなり御辺おんへんと某たれと朋友ともの交まじり浅あくく成なりなり天下てんか二ふたは分わかりし
 依よて互まは其縁そのえんよりく敵たけと号ごうし御方おんかたとあるは是これ全天下ぜんてんかの事ことも
 て私わたくしの意趣いそなり。就これ之の事ことの心こゝろを案あんぶるは相列世さうりつよを執とて已やは九代百六
 十年とんねんなり天修てんしゆを思おもひ道理どうり道みちるは処ところなり是これ一ひと次たぎは人ひとを論ろんぶるは今いま此
 朝家あそけの正成せいせい義貞ぎじん圓心えんしん尊氏そんし長年ちやうねんなど絹宗ぬいむね徒との良將りやうしやう在ある帝都ていと奉ほう

對君忠たいくんちゆうを致いたさん事ことを專せんとせり今東國いまとうこくの大將たいしやうの中なかは雅みやびら此等これらは對たい
 て戦いくさを決けせんや是これニふたつ又日本またにっぽん一列都いちれつと而王化わんげを仰おほい少々せうせう恨うらみの雖な有あ之の故ゆゑ相州さうしゆ此
 修しゆを恨うらみ對たいを多おほくく十とりして二ふたツつなり天下てんかの士し豈あ其恨そのうらみ少すくく捨す多おほく
 は親おやん哉や是これニふたつなり然しかは御辺おんへん達たつた是等これらの事ことを不辨ふべんして滅亡めつわうを目めの前まへ
 は得えん武家ぶけと一ひと成なり二ふた天の君あまのきみは奉對ほうたいて弓ゆみを引ひき事こと何なにぞ武ぶ垂たり
 を逆さかは滅亡めつわうを一家いけは取とり又父祖ふその骸かみを空仕くわじりは不孝ふかうの罪つみあり早々せうせう武
 家一味けいゐまいの志こゝろを捨すて一ひとの忠義ちゆうぎを可被かひ致物いたり然しかは正成せいせい御下向おんげかう以前いぜんは事
 有ある捕殿とらでん下向げかうの後のちは如何いかなる忠ちゆうを在あるは共今少ともいませうの忠ちゆうも同おなじ
 づらづらと絹送ぬいせきらせたる又瓜生うりうゑと山岸やまがしと熊谷くまがひと名越なごが執事しやくじ岩崎いわさき右
 衛門ゑもん太郎たろうが方かたへ忍しのびの使つかいを以もつて絹送ぬいせきせたる挑井ちゆうせい小勢せうせいを以もつて當所たうじよは相支あひさ候
 又近また日京都ひきやうとより捕正成とらせいせい大勢たいせいまで罷下まりは由早馬ゆはやま度々たゞ申侍まをらひる彼から下
 て後のちへ何なにを思おもひ立たて共不圖ともな良將りやうしやうなるは難たがひ侍まをらひるなんはいまは下くだらる

前直常を御退治しむゆび由々敷御大事なるなり然者越前國の事ハ先
 祖より代々國人等親と侍る此者ハ當國を給らハ時日を回らハ直常
 退治可仕ハとなり是ハ兩方を練て何方なり共早く事の調ハん方をハん
 とちり岩崎使を我陣ハ留置時兼ハ談ハ名越不喜ハて云傳ハ捕ハ千ハ叙ハ破
 龍ハ時郎ハ從ハ角ハ謂ハせハ城中ハ東國の兵を引ハ餘多ハ討ハてハ今勝負
 を計ハ小武家ハ十ハとしてハ僅ハ一ハツを得ハたりハ豈強ハを捨ハて弱味方ハ屬ハせんハ死
 又彼者共朝家を恨ハる子細あり共知らハざるハ實ハ否難定ハ乍去斯ハて止
 かんハ武畧ハの不足ハ所ハなるハべハ先越前國の事最可ハ當行忠義ハゆハ重
 く恩賞在ハるハ但ハ正成古千ハ劔破ハ在ハ一時斯ハ練ハて寄手ハの兵を討
 一ハ事有ハ今の如ハんハ夫ハ乘ハる間敷ハとなり又上木ハと深町ハがハ裕ハらハの
 者共ハ何様ハも先非ハを悔ハで忠戦ハを致ハんとハ此返事ハを聞ハてハさハりハの
 直常ハ扱ハハハ時兼ハ此ハ変ハを知ハてハりハ然ハ上木ハと終ハせハ練ハもハ偽ハりハ御

方謀ハらハるハかハんハ如何ハせんハと案ハどハるハが練ハハハ可ハ深ハ不可ハ恐ハ是古ハの法ハなりハと
 思ハひ定ハるハ刃ハびハく日ハを定ハ一萬ハ余ハ騎ハ集ハるハ兵ハを二手ハ分ハ一手ハハハ六ハ十
 余ハ騎ハを敷ハ地上木山岸ハ生ハ深町ハ熊ハ谷ハ何ハも案ハ内ハ者ハかハるハ夜半ハ過ハる
 程ハ陣ハを立ハく密ハ大聖寺ハの城ハの後ハなる山ハ取ハ上ハり爰ハ深町ハ三郎
 左衛門ハと二千ハ余ハ騎ハをハ残ハ置ハ城ハの西ハの川ハを渡ハく名越ハが陣ハの後ハ三千
 余ハ騎ハをハ伏ハしハたりハ残ハるハ一千ハ余ハ騎ハハハ此ハ彼ハの陣ハのハ手ハ當ハとハて二百ハ宛ハを
 今ハて伏ハたりハるハ返忠ハの者ハの内ハ長九郎ハ左衛門ハハハ宵ハより大将ハの陣ハへ忍ハを入
 る事ハ十六ハ人ハ夜半ハまで其ハ身ハも大将ハの陣ハ在ハしハ神部ハハハ元來ハ將ハの陣ハを
 在ハ去程ハ寅ハの刻ハも成ハるハ直常ハ四千ハ余ハ騎ハをハ大手ハより押寄ハ時ハのこ
 ちを發ハ堀田ハ先陣ハ三番ハの峯ハ固ハめたるハが我陣ハ火ハを懸ハて陶ハを發
 して五十ハ騎ハ三十ハ騎ハ手ハを分ハく切ハ入ハる程ハ北國ハの緒陣ハ散ハ々ハ成ハるハ直常
 四千ハ余ハ騎ハをハ是ハを追ハて城下ハを直ハ川端ハ討ハて出ハる時ハ大聖寺ハ城

の後の山は伏せ居る兵城中へ矢を發して圍を作ら九川の向城の方の先陣へ前後乱れしめて皆敵とぞ見え依之時兼が陣振動寸已は川をハ敵の越来る様は聞へらるる時兼先敵川を渡らば追入んと逞兵三百騎計めて打出る処は妻手の山の陣は火を放ちし長九郎左衛門已は敵と與しぬると呼つく矢を發し是を見く神部ハ時兼が本陣ハ火を放ち已は敵は成ぬと申依之緒陣我先よしとぞ落行々る時兼前後の敵を防ぎ兼我陣へ入らんとする所へ上木山岸長と一ツは成て懸向ふ時兼是を懸散してこそと真前へ進んで懸破り後へ抜てなまハ矢三筋まで立ぬ少々の疵を六事とも為ざりし中にも股の下膝の口を射さむと足も曳きさるる人多く人手は懸りしと自害するを山岸が郎從馳合く首を取ぬ軍已は散じて夜も漸く明け大聖寺の城中は在し兵も皆崩落し北國の乱静りたり是直常都を立んとす

る時正成が云時兼ハ能大將と侍ぞ一謀なく難亡と七重を謀と授し其第三の謀事是なりとぞ聞了。其後ハ末々の平氏共少々身を隠し貌を替て此の山奥彼の浦は在と雖今ハ平家立直る事くく思はん其昔を忍び一人も皆怨敵の心を改て足利尊氏こそ屬する者多かりたる扱し尊氏の威勢自然は重く成り思ふるる世と成り成るる

傳曰此軍果て後尊氏よりの軍記は新田四郎が事ハ載らむとせ片瀬鎌倉中の合戦も皆尊氏の郎從が仕る様は記せられり捕不思議思義貞は向ふ様ハ尊氏鎌倉へ不來前は皆新田四郎が戦功なア去バ名越金沢葦名諏訪等大名十二人宗徒の侍五十七人とも義重が手へ討取新田鎌倉へ乱入してこそ尊氏が先陣師直來りしと三浦入道語り侍らんと去へ義貞新田は置一四郎が往進状爰は有とて取出し

と見せしむる三浦が語る少く違ふ正成何とぞ上聞の達し給はざる
 ぞとて人の義貞此門の致しうる高名へ高名は非ざりし尊氏一類の虚
 言ハ皆眞實又成侍とる上六尊氏が往進は依て御尋問らば申侍らん
 と思候は足利の註進状大に相違在バ扱を能く上聞は不達とぞん
 ト身の不肖を歎討よりせと申されは正成も不興氣を退出
 せらまるとなるん

師直闕新田一族所領

義貞追足利一家給人

去程は足利宰相尊氏ハ相摸次郎時行を退治して東國馳て静謐お
 なりなるに勅約ある上何の子細可有とて未宣旨とも不被下よと
 て征夷大將軍と稱し又東八ヶ國の官領ハ勅許有し事なるはとて今
 度箱根相摸川まで合戦の時忠輩は恩賞を行へる付て元弘の軍
 忠ありつと新田の一族拜領したる東國の所領ども悉く闕所はなし

て給人をぞ被付たる是へ元來尊氏の意より出たる度はありは足利家
 の執事高右衛門師直己は東國官領勅許の上何の子細あるべき
 とて斯斗らひになり相州河村の郷は是又大江田兵部少輔元弘の忠
 戦有し故は義貞与へらまると所領どもを師直今尊氏直義もも不知闕
 所の内は書入たる其外新田一族どもの所領多く闕所は書入り尊氏兄
 弟ハ此事を少し不知師直が注文の如く庄郷を軍勢の恩賞は被行たる
 中も河村の郷と尊氏の一族荒川五郎は被遣又世良田大膳大夫が
 知行もる豆州の内大海八幡の兩郷を横田十郎は被充行たる横田荒川
 が代官先の代官を追出さんとはなきども不出既は確執は及ぶ度數目こ
 ころよりつと兩代官ども尊氏ハ初ふ尊氏兄弟驚き師直を呼よせ
 此事を努くあらぶくと被申たりとて師直御従可然とて不
 存の新田の一族ども先年拜領仕りし所領を除き此度戦功の者

不被充行はるる所の地は向は不侍は然ま何を以て今度命を捨
 と軍忠を成し者共は所領を給りたる若又上聞を憚りて忠賞を不
 被行は於ては向後當家は奉對維る忠を盡し侍んやと申る。依
 之尊氏兄弟も師直が奸弁理の當然と被思々々兩人の代官も如
 何さま重て返事を可申るりとて歸さるる。四五日も過るる
 程は新田の代官と荒川五郎と河村は於て軍あり荒川戦ひ負た
 大海八幡まで新田の代官と横田十郎と合戦ありて横田終は戦ひ
 負て引退く其外所々新田の一族どもの所領代官の弱者も被追出
 強者の軍も及び或は僅の縁を求て尊氏兄弟も訶へ或は京都へ早
 馬を上さんとする由聞へくれは尊氏兄弟も師直が仕置理ありと
 いへども今國乱まがらき事へ又師直が非義は在とて氣色不快新
 田朝敵まであつたれば定て君の御外やあらんぞらん又以前の御教

書を取らんせんとせば義貞此由を聞て嘲ん事も無念もして又當家
 威を減むるも似たり今心中の根を顯して向朝家弓を引んとするも
 大義の計略は急は調難く。兔やせば角やあらんと一族を集て十日
 計り評定を加へるべきけれども指する義勢もかり。然も義貞此強動
 を聞て大は怒り安うら尊氏兄弟が行跡なる事を上聞は達せは准
 后は掠めらるる。當家重々の道理ありといへども皆非は落て天下
 の笑種となるべし。所詮我分國は在足利一類の所領を皆押取て家
 人共は扶持せんは何条不足の可在着此事主上より御尋もあらは退
 て道理の旨を申上ん又横邪の御行ひあはば節度を賜へる人の旗の前
 りて討死を快くする道ぞとて我分國は越後上野駿河播磨杯は
 在足利の一族知行の庄園を押して類家人は行ひまらるる。結局新田
 の余類東八ヶ國は在る所領より多き事一万三千貫之足利一族の代

官迷惑して此趣を尊氏に訴ふ尊氏は是を聞如何あらんと一族を集て
 異見を問申されり多きを異議すましくして事行べき様なりけるは舎
 弟直義被申す今へ不遁処あり東八ヶ國の中は在新田が所領の代
 官を皆追出し越後上野の義貞が分國の内は在此方の家人どもの所
 領を新田に不被取様は軍勢を備て戦を快くせんは不如の君より御
 尋あはば事の様を可申上と被申すは播磨の所領は西國に親し
 き國人どもの縁を求めてこそを頼と語ひ残り國々へも如斯せきまれば
 後より義貞分國を横領せし足利一家の代官ども新田一家の代官と
 合戦及びびくまども三十日とも休へどして皆追落さるるなり扱は東
 八ヶ國の中も義貞を親しと思ふ者多きは所々領内の城へ取籠り
 て足利の代官と戦ふは廿四ヶ所の内六ヶ所の無念追出されり是だ二十
 一ヶ所の不落して戦ふ度毎に利を得りけるは足利無念は被思け

共詮むる方もなかりき此頃諸國の武士どもの中は足利に親ま
 者共いほこれり成不思議もあは足利殿朝敵と成るへく我ホ
 も其手は屬して一戦を快く家の安否を定ん者をと云又新田具
 員の侍は皆見よ義貞朝敵とかり申されり足利の君の重なり
 臣ちり上公家の人々も皆輕くせむ准后亦御親を深く依之義貞
 とは君の御覺も不快く我口惜き我等の義貞の手は屬し戰場あて
 命は輕ト家の栄を一時は定むるものと親しきども寄合私語
 申り其根えを尋らふ去るえ弘の初義貞鎌倉を責亡して軍功
 諸人は勝をとりて東國の武士ども皆我下より可立と被思たる所
 は足利殿の二男千壽王殿四歳に成まらば軍散ト六月三日下野國
 より立て大藏の谷に御坐りけるは又尊氏御都まで忠賞抽て異他
 と聞えたるは東八ヶ國の兵ども心替りして大半は千壽王殿の手

平氏の
時運拙
時兼
大聖寺
戦死の
図



依之千壽王の郎從紀五郎九衛門を始として皆不興氣なる氣色頭
 まつり宗凌の人々寄合て評定し千壽王殿を六下野に留置参らせ
 五郎九衛門の三百騎討りて義貞の軍勢は加わりその餘の家人の
 新田の縁を求む候ひなり尊氏後京都に此事を聞て安んず候と謂
 ましから義貞の内心中五郎九衛門が行跡別を企むの条不得心と被
 思ひ置ども露程も色も出されど新田の一族の中より片腹痛き五
 郎九衛門が為躰うまると嘲る者も多うりたり而て高時亡びて後
 六月三日は千壽王鎌倉の宿所へ遷て住せらましが父尊氏京都へ
 於て一戦は朝敵を亡し抽賞他は異ある由聞えたり何し人の心
 移りて變りて千壽王へ附從する者如雲ありたりども高名をも仕け
 らるる皆新田にぞ屬したり又尊氏兄弟の方より今度鎌倉合戦
 は忠有し人々一々記して参せよ不日は上聞は達して恩賞を沙

汰致し申与ふるにやんと紀五郎左衛門が方へ謂下しう依之軍忠
 をちり紀武士どもは媚つらひと千壽王の屬したり義貞
 大に憤りてその者共の宿所へ押寄軍せんと被申しと船田入道大
 諫今先亡の余黨隙を伺ふ時あり此戦出来たり又世は如何あり
 更ら起りてかみ君の敵陣を憚り思召せり又世の聞耳も最童くは
 せん只聞東太平の後御上洛在て兎も角も御沙汰あり侍とあんと
 申は付て義貞も無念をこころ先此度の軍はかりたり
 因曰一書は義貞若宮よて首共を實檢し御池まで太刀長
 刀を洗ひ神宝を取出せし條は義貞の業にあらず守実の新田が一
 族里見小四郎三浦入道若宮の陣を取て在り其手の軍勢
 首共を取て氣色をとり来り三浦が郎後神殿を打破し重
 宝を奪ひたりたり義貞此事を聞ておどかに驚て船田入道を

して其重宝を収集め如え神殿へ被納りしふ二ツ引両の旗有
 て八幡殿の御願書あり奇特の重宝なり若中黒の旗は於て
 申し下らざるはと宣いとあり去るを紀五郎左衛門是をまいて若
 宮の別當又申て奉へ別當此事を義貞小説をまいて免しぬ
 武家の重宝とて持来り然るに此巻の君山に於て書頭せぬ
 後日直義女意は命とて此を除き如是書せし處あり猶官方は持
 傳る所の本少古の如く在しと其後常久入道是を非本と口ちて
 焼矢ひとたりと云々编者按るに義貞若宮は陣せし以下
 毛利本及び北條金勝院西原院南都本ホの古書を見へど
 義貞の業は不在事を是と云ん故

南北太平記圖會卷十三終



